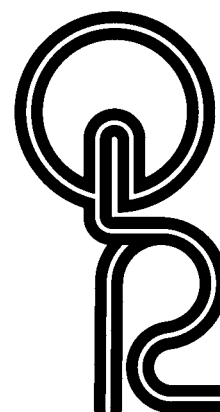


# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 17 No.5, 2010



2010年大会では、例年どおり一般発表やシンポジウム、表彰、ポスターセッション、巡検が行われた。また新たな試みとしてポスターサロンや学会賞・学術賞受賞者講演会も設けられた。それらの詳細は本誌で報告されている。

Vol. 17 No. 5

October 1, 2010

新名誉会員紹介 . . . . . 2	総会議事録 . . . . . 28
大会報告 . . . . . 4	受賞者講演会報告 . . . . . 29
学会賞・学術賞 . . . . . 5	大会シンポジウム報告 . . . . . 30
論文賞・奨励賞 . . . . . 9	各種行事 . . . . . 31
INQUA 関係 . . . . . 11	大会巡検報告 . . . . . 32
研究委員会報告 . . . . . 13	シンポジウム報告 . . . . . 33
特別委員会報告 . . . . . 14	学会賞・学術賞募集 . . . . . 34
学術会議報告 . . . . . 15	追悼 . . . . . 35
シンポジウム案内 . . . . . 15	公募 . . . . . 35
評議員会議事録 . . . . . 16	会員消息 . . . . . 35
幹事会議事録 . . . . . 26	2011年1月行事案内 . . . . . 36
ポスターサロン報告 . . . . . 26	

## ◆新名誉会員の紹介

日本第四紀学会会則および名誉会員選考基準に基づき、名誉会員候補者選考委員会（陶野郁雄委員長、大場忠道、斎藤文紀各委員）により名誉会員候補者の検討がなされました。選考委員会では、本会の会長・長年の評議員・日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長、INQUA（国際第四紀学連合）の役員などを努め、あるいは日本第四紀学会賞を受賞するなど、第四紀学の発展に多大の尽力をされ、また長年の研究上、研究組織上の功績などについて審議されました。その結果、これらの功績について誠に顕著な3名の会員を本会の名誉会員候補者として推薦する旨の答申が、6月19日の第3回評議員会になされました。この答申を受け、評議員会は選考委員会から推薦された上記3名の名誉会員候補者を決定し、8月21日の総会で決議されました。ここに推薦理由とともにご紹介いたします。

### 名誉会員と主な推薦理由

熊井久雄氏（地質）1939 生 13 期（1975-1999）にわたる評議員、及び会長（2001-2004）  
町田 洋氏（地理）1933 生 15 期（1969-2005）にわたる評議員、及び会長（2005-2008）  
松島義章氏（地質）1936 生 10 期（1987-2009）にわたる評議員、及び学会賞受賞（2008）

### <名誉会員 熊井久雄氏>



#### ●推薦理由

熊井久雄会員（1939年生）は、主として第四紀層序学および水理地質学専門領域の研究を行ってきました。特に、第四紀年代層序問題について先導的な研究成果を挙げ、日本の第四紀学研究に重要な指針を提示しました。これらの成果は多くの学術論文と専門書だけではなく、解説書を通して広く社会に公表されています。また、農林省農林技官を9年間勤められた後、信州大学・大阪市立大学における教育・研究を通じて、多くの優秀な技術者・教育者・研究者を育成されました。熊井会員は、評議員を13期（1975～1999年）、さらに副会長、そして2001～2004年の間会長を務め、INQUAにおいても1981年から長年に渡って「第四紀層序小委員会（Subcommission on Quaternary Stratigraphy）」

委員やアジア太平洋層序小委員会委員長として国際的にも多大な貢献をされました。このように、熊井久雄会員が第四紀学の進展に果たされた研究上、組織上の功績は顕著であり、ここに本会の名誉会員として推薦いたします。

### <名誉会員 町田 洋氏>



#### ●推薦理由

町田 洋会員（1933年生）は、日本列島とその周辺海域におけるテフクロノロジーを基礎とした一連の研究により、第四紀編年の確立、陸と海との対比、考古学への貢献、また火山噴出物の人間活動や自然への影響など、第四紀学のみならず関連する他分野にも多大な貢献をしてきました。広域テフラの基本層序の確立は、日本列島の陸域と海域のみならず、東アジア広域の編年と考古学に多大な貢献をし、国際的にも高く評価されています。これら一連の研究成果の多くは、学術論文として学会誌などで公表されただけでなく、著書としても取りまとめられ、関連する多くの分野の発展に貢献しました。また15期にわたり評議員を務め、2005年から2008年には会長として学会と第四紀学の発展に多

大な貢献をしてきました。更にINQUAのテフクロノロジー委員会の委員長、日本学術会議の第四紀研究連絡委員会及び地質科学総合研究連絡委員会の委員長、INQUAダーバン大会の日本代表など、第四紀学に関係する国内外の要職を歴任されました。これらの功績により2009年には学会賞を受賞されました。このように、町田 洋会員が第四紀学の発展に果たした研究や組織上の功績は顕著であり、ここに本会の名誉会員として推薦いたします。

## &lt;名誉会員 松島義章氏&gt;



## ●推薦理由

松島義章会員（1936年生）は、主として日本各地に分布する沖積層に含まれる貝類遺骸群集の解析から、完新世における日本列島の古環境の研究を行ってきました。特に、南関東の内湾性貝化石群集に現在は生息していない亜熱帯性群集を見出し、多数の<sup>14</sup>C年代値を基に縄文海進に伴う貝類の組成変化を明らかにしました。さらに調査地域を鹿児島から北海道まで広げ、縄文海進に伴う貝類の生息環境の時代的・地域的な変化が、汎世界的な気候変化と海水準変動とも深く結びついていることを見出しました。それにより、日本列島の完新世の地殻変動量、海水準変動等についての評価を可能にし、全国的な沖積層や段丘地形の形成発達史や、黒潮と対馬暖流の変動に伴う沿岸環境の変化と考古学との関わり

りなど、関連する多くの分野の発展にも貢献しました。その成果は多くの論文や著書に公表され、一般書や博物館の普及活動等を通して第四紀学の研究の面白さ・大切さを広めた功績は高く評価されています。更に評議員を10期（1987～2009年）務め、学会の発展にも寄与されました。これらの功績により2008年には学会賞を受賞されました。このように、松島義章会員が第四紀学の発展に果して研究および組織上の功績は顕著であり、ここに本会の名誉会員として推薦いたします。

## ◆平成23年度笹川科学研究助成の募集

## 1. 学術研究部門

## (1) 申請区分と研究対象領域

## A [一般科学研究]

人文・社会科学、自然科学（医学を除く）に関する研究

## B [海洋・船舶科学研究]

「海洋学および海洋関連科学」ならびに「船舶および船舶関連科学」に関する研究

## (2) 研究計画と助成額

研究計画は、単年度（平成23年4月1日から平成24年2月10日まで）内に達成され、成果をとりまとめられるものとします。助成額は、1研究計画100万円を限度とします。

## (3) 募集対象者

A [一般科学研究] 大学院生あるいは所属機関等で非常勤または任期付き雇用研究者として研究活動に従事する者であって、35歳以下の者

B [海洋・船舶科学研究] 大学院生あるいは所属機関等で研究活動に従事する（常勤・非常勤は問わず）者であって、35歳以下の者

## 2. 実践研究部門

## (1) 研究対象領域

教育・学習・自立支援等を行う様々な組織・団体（NPOを含む）に所属する者またはグループが、その実践の場で抱える諸問題の解決のために行う研究

## (2) 募集対象者

専門的立場にある者、あるいは問題解決に取り組んでいる当事者など。

## (3) 研究計画と助成額

研究計画は、単年度（平成23年4月1日から平成24年2月10日まで）内に達成され、成果をとりまとめられるものとします。助成額は、1研究計画50万円を限度とします。

## 3. 募集期間

平成22年10月1日～平成22年10月15日<必着>

募集要項・申請書はこちらより <http://www.jss.or.jp/sasagawa/apply/apply.html>

## &lt;お問い合わせ先&gt;

財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル5F

TEL 03-6229-5365 FAX 03-6229-5369

E-mail: [ssrg-jss\(at\)silver.ocn.ne.jp](mailto:ssrg-jss(at)silver.ocn.ne.jp) URL: <http://www.jss.or.jp>

## ◆日本第四紀学会 2010年大会報告

日本第四紀学会 2010年大会が、8月20日（金）～8月22日（日）の3日間にわたって、東京学芸大学（東京都小金井市）において開催されました。

一般研究発表は、20日と21日の2日間にわたって行われ、オーラル26件（キャンセル1件）、ポスター21件の発表がありました。また21日の午後には、2010年学会賞・学術賞受賞者講演会（第1回）が行われ、多田隆治会員（学会賞受賞者）と鈴木毅彦会員（学術賞受賞者）による講演がありました（本誌の受賞者講演会報告もご参照下さい）。22日には公開シンポジウム「自然史の教育と研究をすすめるために一さまざまな分野からの取り組み」が行われました。

大会参加者数は、21・22日の一般発表および講演会では会員135名、非会員および不明48名の合計183名、22日のシンポジウムでは新規受付138名でした。

一般研究発表会の合間には、評議員会と総会が開催され、2009年度の事業・決算・会計監査、第21回INQUA大会招致準備委員会など各種委員会、および各研究委員会等の報告と、2010年度事業計画・予算案、名誉会員の決定等の審議が行われ、承認されました。また、内規の一部改正が評議員会で審議され、総会で報告されました。総会終了後、新名誉会員の表彰と、学会賞3件・学術賞1件・論文賞受賞1件・奨励賞2件の授与式がありました。

21日の夕方には、東京学芸大学飯島会館2階にて懇親会が開かれました。遠藤会長・小泉大会実行委員長の挨拶、杉村名誉会員の乾杯から始まった懇親会は、歓談、各賞受賞者の挨拶を経て、来年度大会開催地代表の鳴門教育大の米延会員挨拶、最後は小野副会長の締めくくりでお開きとなりました。参加者は75名（うち招待者11名）でしたが、実行委員会のご配慮で、階下の控室で二次会に参加する会員もいました。

22日のシンポジウムでは、10件の講演と本学会初めての試みである「ポスターサロン」を開催しました。本シンポジウムは財団法人コカ・コーラ教育・環境財団の協賛と、日本ジオパークネットワーク・日本地学教育学会・日本地理教育学会・日本理科教育学会のご後援をいただきました。また、コカ・コーラ教育・環境財団からは大会開催中の3日間にわたり、飲み物を提供していただきました。シンポジウムでは、講演に加えてポスターサロン参加者による「防災人形劇」の上演もありました。ポスターサロンは147団体の参加があったため、会場が大学食堂へ変更となり、大変なにぎわいとなりました（詳細は本誌のシンポジウム報告をご参照ください）。

23日には、「里山景観の違いを探る—地生態学の視点から—」と題する巡検が行われました。案内者は科学技術振興機構の増沢有葉会員、東京学芸大学小泉武栄会員、日本自然保護協会の辻村千尋氏の計3名で、一般参加者は15名、ほかに学芸大関係者4名でした。数日來の猛暑の中、秋留台地の湧水に涼を求め、また、加住丘陵と五日市丘陵の里山景観の違いを観察しました。当日はC.T.キーリ会員も自転車で同行し、案内をしてくださいました。（詳細は本誌の巡検報告をご参照ください）。

最後になりましたが、大会の準備・運営を進めていただきました実行委員会の小泉委員長、目代事務局長をはじめとする運営スタッフの皆様、心よりお礼申し上げます。

（前行事担当幹事 久保純子）

## ◆日本第四紀学会幹事会新役員

長期海外出張のため久保純子幹事（行事担当）が2010年8月で退任し、三浦英樹評議員が後任となりました。学会活動が益々活発化するよう努めて参りますので、よろしくお願いいたします。

## ◆学会賞・学術賞受賞者選考報告

(学会賞受賞者選考委員会委員長：公文富士夫、幹事会)

日本第四紀学会では、学会賞、学術賞、功労賞、論文賞および奨励賞を設けています。このうち2010年度は学会賞、学術賞、論文賞、奨励賞の選考を行い、受賞者が決定されました。

学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、および学会活動に貢献した正会員に授与される学会における最高の賞です。学術賞は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与されるものです。また、論文賞および奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を公表した会員である著者に授与されるもので、とくに奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的としています。2010年度の各受賞者について、以下にご紹介します。

## (1) 選考経過

本年度の学会賞等の候補者の推薦・立候補は3月31日をもって締め切れ、学術賞に1名、学会賞に4名の候補者が推薦された。学会賞受賞者選考委員会(公文富士夫委員長、小池裕子、兵頭政幸、中村俊夫、山崎晴雄各委員)にて検討された。

電子メールでの審議および5月30日に名古屋大学年代測定総合研究センター会議室にて選考委員会を開催し、検討がなされた。

学会賞については、個々の候補者に対する推薦文および研究業績、学会活動への貢献などを点検し、その資料を基に、4名の候補者が学会賞に相応しいかどうか審議し、論文数(報告や学会講演も含む)、被引用数や後継者育成における貢献度、国際的な活動度と論文の国際誌での被引用数、社会への貢献とインパクトの大きさなどを重視して、総合的に評価した結果、3名の受賞候補者を決定した。学術賞については、候補者が1名であったこと、委員の多くから肯定的な評価が示され、電子メール上での投票および5月30日の選考委員会で、受賞候補者を決定した。

6月19日の第3回評議員会において、学会賞受賞者選考委員会より学会賞の受賞候補者の答申が行われ、質疑応答の後、学会賞として岡田篤正、吉川周作、多田隆治会員が、また学術賞として鈴木毅彦会員が受賞者として決定された。

## (2) 学会賞・学術賞受賞者

## 学会賞

●岡田篤正「変位地形を用いた活断層の活動史および活断層危険度評価に関する一連の研究」

岡田篤正会員は、長年に亘り日本の活断層の変位地形、活動史に関する研究を牽引してきた。中央構造線活断層系の右横ずれ運動の研究に始まり、阿寺断層、跡津川断層、三方断層、根尾谷断層、山崎断層など日本の代表的な活断層や地震断層について、その断層地形形成過程、活動度、活動時期などを、空中

写真判読と現地調査、トレンチ調査などによって共同研究者と共に次々と明らかにしていった。とくに1960年代末、日本で最も顕著な地質構造線である中央構造線に沿って、谷や尾根の横ずれ屈曲、同一段丘面の食い違いなどを発見し、最新の地質時代においても断層運動が継続していることを指摘した功績は大きい。このことは当時導入されたプレートテクトニクス概念と重なって、日本の第四紀地殻変動研究に新たな展開を導く契機となり、この後、変位地形から活断層を探す研究は全国規模で急速に広がっていった。また活断層のトレンチ発掘調査は、鳥取地震を引き起こした鹿野断層において岡田篤正会員が日本で初めて実施し、活断層の活動時期を具体的に示すとともに、断層運動が同じ場所で繰り返されていたことを実証した。この成功が今日広く行われているトレンチ調査による活断層の活動履歴調査、危険度評価手法の基礎となっていることを忘れることはできない。1990年代からは韓国の活断層についても積極的に調査を進め、国際的な貢献を行っている。さらに、「日本の活断層」の編集幹事、「九州の活構造」、「近畿の活断層」の編集責任者として、社会的に広く活用される活断層のカタログ作成において中心的な役割を果たした。1995年兵庫県南部地震以降は、国や自治体の活断層調査委員会の委員を多数務めたほか、国土地理院発行の「都市圏活断層図」作成にも中心となって活躍し、地域の活断層危険度評価に大きく貢献するとともに、活断層調査の行政的な指導も推し進めた。

岡田篤正会員は日本第四紀学会の活動に関しても、1975年度より2006年度までの間、12期にわたり評議員を務め、とくに1993年度から1996年度まで編集幹事として活躍した。また、1999年京都大会では実行委員長として、大会やシンポジウムを運営し成功に導いた。

このように、岡田篤正会員は、第四紀学の特に変動地形、テクトニクス分野において長年先導的な役割を果たすとともに、日本第四

紀学会の活動にも多大な貢献を行ってきた。これらの功績は甚大であり、ここに岡田篤正会員を日本第四紀学会賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉>

2010年度日本第四紀学会学会賞表彰を誠に光栄に存じております。受賞件名は「変位地形を用いた活断層の活動史および活断層危険度評価に関する一連の研究」となっています。



岡田篤正氏

私の最初の学術論文は、「阿波池田付近の中央構造線の新期断層運動」であり、第四紀研究(1968)7巻に掲載されました。その後、四国全域の中央構造線沿いに右横ずれが卓越した第四紀の活動があると判り、調査域を讃岐山脈南縁・四国山地北縁・松山平野域へと拡大して、四国の中央構造線活断層帯を学位論文としてまとめました。当時、詳しい空中写真・国土基本図のような詳細地形図・C-14年代測定法などが利活用できるようになり、詳しい変位地形の検出にとどまらず、地形地層発達史・3次元的な運動像・変位速度・変位量や速度分布などが究明できました。

1943年鳥取地震の地表震源断層である鹿野断層のトレンチ発掘調査を1978年末に実施しましたが、その1つ前の活動も変位量や発生年代値と共に解明でき、同じような地震が同じ活断層で繰り返すことが判りました。これに引き続いて、山崎断層・濃尾地震断層・跡津川断層・糸静線・中央構造線などの活断層帯を対象に毎年のように活断層や地震断層のトレンチ調査を行ってきました。これらの成果として、各活断層の実在性・運動様式・3次元地下構造・活動履歴などの重要な新資料が得られ、全調査者は興奮しながら、厳しい調査にも当たってこれました。こうした成果の積み上げが活断層の危険度あるいは長期評価へと繋がり、トレンチ調査は今日ではごく一般的な手法となってきました。

活断層カタログの集大成を目指した「日本の活断層」・「九州の活構造」・「近畿の活断層」の刊行、都市圏活断層図のような「詳細活断層分布図」の出版、韓国の活断層の新発見とトレンチ調査なども可能となってきましたが、これらは数多くの研究者のご協力の賜り物であり、この機会にお礼を申し上げます。活構造の研究はまだ未解明の課題が数多く残されており、興味は尽きません。これからも楽しみながら、調査・研究に取り組んでいく所存ですので、よろしくご教導・ご支援をお願い致します。

岡田篤正（立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授）

学会賞

●吉川周作「火山灰層序および完新世環境地質に関する一連の研究」

吉川周作会員は、第四紀学の重要な研究対象である大阪層群および古琵琶湖層群の火山灰層について、火山ガラス・岩相および岩石学的特徴の詳細な記載に基づき高精度の火山灰層序を確立した。これにより、地層の正確な広域対比が可能になり、火山噴出源の特定や古環境解析、テクトニクス解析などの研究が大きく進展した。なかでも、琵琶湖や大阪湾周辺で採取された長い期間をカバーするボーリングコア試料に対して、共同研究者とともに火山灰・微化石について高時間分解能の解析をおこない、海洋酸素同位体層序と対比した過去40万年間の高精度火山灰編年は、地質学だけでなく古気候学、古海洋学、古生物学、地球物理学など多くの分野に貢献した。

吉川周作会員は、また、ため池堆積物を用いた古地磁気・微粒炭・球状炭素粒子の解析や原爆イベントの検出など独創的な研究も先駆的に手がけ、完新世、特に人新世の環境地質研究における新分野の開拓に貢献した。

吉川周作会員が学術論文として発表した研究成果は、学会誌「第四紀研究」における被引用回数が際立っていることから見ても、日本の第四紀研究の重要な基礎となっていると判断できる。また、同会員の属する研究グループが「第四紀研究」に発表した論文は、2件の論文賞、1件の奨励賞を受賞していることに表れているように、優れたものが多く、学会誌の発展にも大きく貢献した。

吉川周作会員は、本学会の評議員、編集委員、編集幹事、日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員を務めるなど、長年にわたり本学会の運営にも貢献してきた。また、大学における長年の教育研究活動を通じて多くの後継者を育て、日本第四紀学会を担う人材の育成にも大きな役割をはたしてきた。

このように吉川周作会員の第四紀学および本学会への貢献度はきわめて高く、日本第四紀学会賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉>

この度は、日本第四紀学会学会賞を受賞することができ、大変光栄に思っています。

私は学生の頃から、池辺展生・市原実両先生にご指導いただき新第三紀・第四紀層序学の研究を進めてきました。



吉川周作氏

多くの仲間とともに日本の陸水成鮮新・更新統の代表である大阪・古琵琶湖層群の野外調査・地質図作りを行うとともに、鍵層である火山灰の記載・同定方法（火山灰の岩石記載的性質、火山ガラスの形状・屈折率・主成分・微量成分化学分析）、火山灰層序・編年を基礎にした大規模噴火活動史解読、目に見えない微量な火山灰の同定法（火山ガラスや帯磁率を用いた方法）などの研究を行い、近畿・東海地域の鮮新・更新統の火山灰層序確立、福田火山灰の広域対比、高島沖ボーリングコアの火山灰編年と大規模噴火活動史解明などの成果を発表することができました。また、三田村さんたちと始めた大阪平野地下地質研究では、第四系の詳細な岩相・火山灰層序を解明し、深海底酸素同位体比層序・編年と見事に対比できました。これによって視野が一気に拡がり、「動物群の移入と陸橋形成時期の研究」など多様な成果が得られました。本格的に第四紀研究に取り組むのは、1990年頃からで、過去数百年間の大気環境や海域環境の変遷史・人と自然の相互作用解明を目指した人新世（斎藤、2002）環境地質の研究です。現在、「東アジア越境大気汚染の長期時空間変動解析」をテーマに、大阪市大・近畿大・信州大・早稲田大・大阪市立環境科学研究所・原子力研究開発機構など地質学・分析化学・環境科学分野の方々と共同して研究を行っています。まだあまり注目されていませんが、今後、この人新世環境地質研究が第四紀学の重要な分野に成長することを期待しています。

最後になりますが、これまでの一連の研究は、多くの仲間や研究室の学生・院生に支えられて進めることができました。今回の受賞はそれらの皆様のおかげです。共同研究者の方々に厚く御礼申し上げます。

#### 学会賞

●多田隆治「日本海堆積物を用いた第四紀東アジアモンスーンに関する一連の研究」

多田隆治会員は、1989年のODP日本海航海参加以降、第四紀の海底および陸上堆積物を堆積学的・地球化学的な見地から研究し、第四紀学の発展に大きく貢献してきた。特に日本海のODPコアやIMAGESコアの解析を通して、日本海堆積物の明暗層が、グリーンランド氷床コアにみられるDOC (Dansgaard-Oeschger Cycle) に対応していることを初めて見出し、日本海の表層と海底環境が東アジアのモンスーン挙動と連動して変動してきたことを明らかにした功績は大きい。明暗層の形成については、低塩分高栄養塩の東シナ海沿岸水が垂間氷期に日本海へ流入し、日本海

の鉛直混合が弱まって暗色層が堆積し、垂氷期には日本海の鉛直混合が再開されて低有機炭素量の明色層が堆積したと説明され、その後の研究をリードした。

多田隆治会員は、指導した学生や若手研究者とともに質の高い研究を国内外に数多く発表している。その1例として日本海に供給された風成塵の研究があげられ、東アジアの乾湿を反映した粒度および粘土鉱物組成・元素組成・同位体比などの指標がDOCに対応して変動していることが明らかにされ、その変動は、東アジアとグリーンランドの気候テレコネクションによる偏西風主軸の南北移動に起因すると主張された。また、ヒマラヤーチベット高原の隆起とアジアの気候変動との関係においてモンスーン変動の全体像を明らかにする研究に取り組んできた。後氷期においても北大西洋高緯度域の気候と東アジアモンスーンとが連動していることを示した。

多田隆治会員は、日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会委員、PAGES-Science Steering Committee member、日本のPAGES会長、IGCP-476議長など、国内ばかりでなく国際的にも第四紀に関連する諸学会の活動に著しい貢献をしてきた。

これらの業績からみて、多田隆治会員の第四紀学および本学会への貢献度はきわめて高く、日本第四紀学会賞にふさわしいと判断する。

#### <受賞者の言葉>

この度は、日本第四紀学会賞を授与下さり、有難うございました。この様に荣誉ある賞を受賞できた事を光栄に思っています。私の元々の専門は地質学ですが、ポスドクで渡米した折に、自分の専門分野



多田隆治氏

以外でも興味を持った事はどんどん追求すべき事、その為には専門分野の壁など気にすべきでない事を学びました。しかし、日本に帰ると、専門分野間の壁が歴然と存在し、分野の壁に悩まされる日々が続きました。そんな折の1989年夏に、国際深海掘削計画(ODP)の日本海航海に参加する機会に恵まれました。当初の乗船目的は、中期中新世珪質頁岩の堆積環境を調べる事にありましたが、珪質頁岩は堅く脆いため、掘削の際の回収率はほとんど0%でした。一方、掘削の際、日本海のどの地点でも、明暗互層で特徴づけられる地層が、海底面から100m以上に渡って連続的に回収されました。その堆積リズムの成因に興味を持ち、研究を始めたのが、私とアジアモンスーンの研究との出会いです。そして、米倉先生が、その研究に興味を持って下さり、



第四紀学会に誘ってくださったのが、私が本学会に入ったきっかけでした。第四紀学会は、他の学会と違って多分野を含み、相互の分野の壁が低く、雰囲気もリベラルだった事を覚えています。その後、この堆積リズムがダンスガードーオシュガーサイクル (DOC) に連動した東アジア夏季モンスーン変動によって形成された事が解り、当時の最新の知識に基づいて仮説を立て、明暗互層の成因を解明していった当時の事を思い出すと、今でも胸がときめきます。これをきっかけに始めたアジアモンスーンに関する研究は、その後、東シナ海やベーリング海、中国西部へと広がりました。また、IODP の日本海、東シナ海掘削計画につながり、掘削は 2013 年に実現する見通しです。授賞をきっかけに、過去のアジアモンスーン変動の研究に興味を持ってくれる若者が増えてくれればと願います。

#### 学術賞

●鈴木毅彦「テフラ対比に基づく中部～東北地方の火山噴火史および古地理復元に関する一連の研究」

鈴木毅彦会員は、中部地方から北関東、東北地方にかけての広範囲の第四紀火山を給源とするテフラ層序の構築を進めてきた。赤城・日光・那須・飯縄・沼沢などの諸火山から噴出したテフラを露頭調査で採取し、火山ガラス及び斑晶鉱物の屈折率測定、X線分光分析 (EDS) による元素組成の解析などにより、それまで対比が混乱していたテフラも含めて、それぞれの特徴を明確にして識別を可能にした。さらに、テフラのフィッシュン・トラック年代測定を実施し、特に中期更新世後半の詳細なテフラ編年を構築した。これら一連の研究は、テフラ編年を利用する研究者から高く評価されている。

鈴木毅彦会員は、前期更新世から中期更新世前半にかけて噴出した広域テフラの対比も進め、飛騨山脈、八甲田火山、仙岩地域、白河地域の大規模火砕流噴出に伴う降下テフラが関東平野の地層中に挟まっていることを明らかにした。東北から関東に向かって運ばれたテフラの存在の確定は、テフラが偏西風によって西から東に運ばれるというこれまでの固定観念を一新した点できわめて重要である。鈴木毅彦会員はまた、関東平野や新潟平野などの堆積物層中に挟まる広域テフラを分析し、地下の地質構造の推定や古地理復元を進めている。この研究は、例えば立川断層の活動史解明にもつながっており、地震防災の観点からも注目されている。

鈴木毅彦会員は、日本第四紀学会テフラ・火山研究委員会の委員長を 1999 年度から

2006 年度まで務め、この期間外も含めて、日本第四紀学会を始めとする諸学会においてテフラ関連のシンポジウム、巡検、講習会などを主催し、テフラ研究の推進や普及を図ってきた。

以上のように、鈴木毅彦会員の業績は高く評価されるものであり、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

#### <受賞者の言葉>

鈴木毅彦 (首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 地理学教室)

この度は日本第四紀学会学術賞を受賞しまして大変に光栄です。今回、賞を頂きました研究テーマ「テフラ対比



鈴木毅彦氏

に基づく中部～東北地方の火山噴火史および古地理復元に関する研究」に関する調査・研究は、1986 年より着手したもので、24 年前に修士論文として開始したものです。ついこの前に研究を開始したとは決して言いませんが、それ程昔ではないと思っていました。しかし、改めて 24 年と文字にしてみますと普段自分が認識している以上に長い時間が経過したと感じます。この研究テーマを開始した当初、研究の行く末は全く想像していませんでしたが、テーマとフィールド (場所も対象年代も) を少しずつ広げながら展開してきたことが結果的に一連の研究としてご評価頂いたのかと考えています。一方で、このテーマにはまだまだ未解決な問題が山積し、新たにとり組みたいことも多くあり、自分としては発展途上と考えています。従いまして今回賞を受けたことはやや予想外で、もし評価を頂けるのならば 10 年以上後であろうと考えていました。私自身としては今回の賞は、昨今の言葉でいえば、中間評価で及第点を頂いたと考え、これを励みにさらにこのテーマを展開させたいと思う所存です。一方で、職業としての研究生活はほぼ折り返し地点を過ぎたところにいると自覚しますので、研究のテーマやスタイルの変化・拡充も必要と最近思うところです。また当該分野の後継者育成は個人的にも学界レベルでも重要な課題と認識しています。後継者育成と自分のことを振り返ると、自分がこれまでの研究を継続できたのは、かつて御指導頂いた先生をはじめ、本学会の活動を通じて知り合うことのできた会員の皆さま、それに東京都立大学時代以来の先輩・後輩、それに学生・大学院生の皆さんによるところが大きいと感じます。皆様へ感謝の意を表したいと思うと同時に、新世代の育成・支援ということを見据えて今後活動したいと考えています。



## ◆論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

(論文賞受賞者選考委員会委員長：岡崎浩子、幹事会)

## (1) 選考経過

本年度の論文賞・奨励賞の推薦は3月31日をもって締め切られ、論文賞に1件の推薦があった。論文賞受賞者選考委員会（岡崎浩子委員長、北村晃寿、鈴木毅彦、高橋啓一、三田村宗樹各委員）にて検討された。論文賞については、推薦1件を含め「第四紀研究」第47・48巻に掲載の論文について独創性・発展性・総合性などについて評価を行った。その結果、全委員了承の上、1件を論文賞候補とした。奨励賞については、「第四紀研究」第47・48巻に掲載の論文のうち、筆頭著者の年齢が奨励賞受賞に該当する論文について独創性・発展性・総合性などを評価し、すぐれた研究者を各委員から推薦し、審議の結果、2名を奨励賞候補者とした。

6月19日の第3回評議員会において、論文賞受賞者選考委員会より、選考に関する経過と最終候補論文・候補者及び推薦理由等の説明が行われた。評議員会での質疑応答の後、論文賞は青木かおり・入野智久・大場忠道各会員による第四紀研究47巻6号掲載論文に、また奨励賞受賞者として谷川晃一朗会員と丹羽雄一会員に決定された。

## (2) 論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文

## 論文賞

● 論説 青木かおり・入野智久・大場忠道 (2008) 鹿島沖海底コア MD01-2421 の後期更新世テフラ層序 47巻6号、391-407頁

多数のテフラが分布する日本列島においては、古くから多くのテフラ研究があり、日本の第四紀研究において重要な役割を果たしている。一方陸上で観察可能なテフラが多数あるためか、これまでの国内のテフラ研究は陸域で実施されるものが多く、深海堆積物とテフラを組合せた研究は充分でなかった。その様な状況の中で著者らは、日本列島周辺のマリンテフラに関する一連の研究を進めてきた。本論文ではこれまで陸域で研究され尽くした感があるテフラを太平洋沖のコアより見出し、コアのテフラ層序を確立するとともに、高精度の酸素同位体比層序に基づきテフラの降下年代を考察した。第四紀の諸現象の年代を酸素同位体比層序から決定するという現在の第四紀研究の主要な方法を国内のテフラに実践し、これまで年代に不明確さが残されていた赤城鹿沼テフラや箱根東京テフラなど複数の後期更新世テフラに対し新たな降下年代を示した。その成果はテフラ研究のみならず、国内の第四紀編年への影響が大きいと判断さ

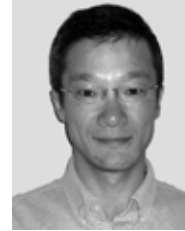
れる。

よって日本第四紀学会論文賞に値するものと判断する。

## ＜受賞者の言葉＞



青木かおり氏



入野智久氏



大場忠道氏

このたびは、日本第四紀学会論文賞を賜り大変光栄に存じます。対象となった論文は、鹿島沖で採取された長さ約46mに達するピストン・コアに介在する23枚のテフラを記載して7枚の広域テフラと対比し、高分解能の底生有孔虫の酸素同位体比層序に基づいてテフラ層の噴出年代を推定したものです。7枚の広域テフラは、日本列島の陸上の第四紀古環境研究で記載されることも多く、“海と陸のテレコネクション”を考察するうえで非常に有意義と考えられます。また、残りの16枚のテフラの給源の特定は論文中では保留したわけですが、発表から1年半がたち、いくつかのテフラは給源の特定がすすみ、予想したとおり関東地方の環境変遷史と、北西太平洋の古海洋環境を結び付ける研究が進行中です。

さて、これまでも酸素同位体比層序からテフラの噴出年代を推定する研究は何度か発表されているわけですが、本論ではSPECMAP年代にともなう誤差についての議論も含めました。“年代値”はどこまでも誤差が伴うものであり、放射年代値はもちろんSPECMAP年代であったとしても誤差という縛りからは逃れようもなく、編年研究者にとっては永遠の悩みの種といえるでしょう。しかし、テフラ層による同一時間面の対比というのは、絶対的な時間基準面となりえます。今後、SPECMAP年代モデルをもっと理想的な年代モデルにおきかえる議論が活発化する可能性があります。その際にもテフラ層による対比が問題解決の鍵になると考えられます。

本コアに関しては、北海道大学の山本正伸教授をはじめ多くの研究者、大学院生諸氏が素晴らしい研究成果を国内外で発表しています。私たちのテフラ研究が日本第四紀学会でこのように高く評価していただけたことで、研究チームの一員としてホッといたしまし

た。また、プロジェクトの統括された東京大学の川幡穂高教授にはコア試料のテフラ研究に多大な理解を示していただき大変感謝しております。

#### 奨励賞

##### ●谷川晃一郎

谷川晃一郎会員は48巻4号掲載論文にみられるように沖積層研究において豊富な資料と複合的な手法を用い、総合性・将来性のある論文を単独でまとめあげたことが高く評価された。調査対象である兵庫県円山川下流域の豊岡盆地には、内陸へ深く入りこんだ厚い沖積層が存在することは知られていたが、これまで、十分な層序学的検討がなされてこなかった。本会員は、多数のボーリングコア資料を用いて、イオウ含有量、珪藻化石、貝化石、火山灰、および<sup>14</sup>C年代など多角的な分析により、沖積層の堆積環境と調査地域での相対的海水準変動を検討している。谷川晃一郎会員の精力的な研究は日本海沿岸地域の完新世の沖積層形成及び周辺の地殻変動評価に関して大きく貢献するものと考えられる。

以上の事由から、日本第四紀学会奨励賞に値するものと判断する。

対象論文：論説 谷川晃一郎（2009）兵庫県円山川下流域における沖積層の層序・堆積環境と完新世の相対的海水準変動 48巻4号、255-270頁

#### <受賞者の言葉>

この度は、日本第四紀学会奨励賞という荣誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。このような賞は、私には縁のないものと思っておりまして、今回の受賞はまさに青天の霹靂のような出来事であり、嬉しさよりも、賞の名に恥じぬようより一層努力していかねばと身の引き締まる思いです。

賞を頂いた論文は、早稲田大学に提出した修士論文に加筆・修正を加えたものです。本論文は単名で投稿させていただきましたが、研究を進めるにあたり、早稲田大学の久保純子先生、神戸大学の兵頭政幸先生、兵庫県立人と自然の博物館の加藤茂弘先生と佐藤裕司先生をはじめとする多くの先生方に多大なご指導を賜りました。また、豊岡出土文化財管理センターの潮崎 誠氏には現地調査などに様々な便宜を図っていただき、豊岡土木事務所、豊岡河川国道事務所などをはじめとする多くの関係各所の方々からコアサンプルをご提供いただきました。さらに、初めての投稿



谷川晃一郎氏

で不慣れな中、査読者や編集委員並びに編集書記の皆様には丁寧にご対応いただきました。多くの皆様にお力添えいただいた結果として、奨励賞を頂けたと改めて感じ、心より御礼申し上げます。本論文では、兵庫県北部の円山川下流域に広がる豊岡盆地において、ボーリングコア試料のイオウ含有量・珪藻化石・貝化石・火山灰分析などの方法から、沖積層の堆積環境及び相対的海水準変動について論じています。内容に関してはまだまだ課題があり満足はできませんが、本研究を通じて多くのことを学び、海水準変動というテーマにも出会えたことで、私にとっては非常に意義深い研究となりました。

この度の受賞を励みとして、さらに研究を進め、地球科学に少しでも多く貢献できるよう、より真摯に研究に取り組みたいと思っております。今後とも、多くの皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

#### 奨励賞

##### ●丹羽雄一

丹羽雄一会員は沖積層ボーリング資料の示す海水準指標から地震性沈降イベントを見出すという研究手法において、その独自性・将来性が評価された。調査地域である濃尾平野の上部完新統のボーリング資料の一連の研究において、対象論文は岩相・粒度・電気伝導度・堆積構造及び<sup>14</sup>C年代を評価し、堆積環境の推定から2つの相対的海水準変動イベント層準を見出し、歴史地震に関連する地震性沈降の発生を明らかにした。濃尾平野クラスの大規模な平野域に存在する活断層の活動イベントを評価することは容易ではなく、丹羽雄一会員の意欲的研究は、海岸平野に分布する沖積層からの地震イベント認識へ寄与するものと評価される。

以上の事由から、日本第四紀学会奨励賞に値するものと判断する。

対象論文：論説 丹羽雄一・須貝俊彦・大上隆史・田力正好・安江健一・齋藤龍郎・藤原治（2009）濃尾平野西部の上部完新統に残された養老断層系の活動による沈降イベント 48巻5号、339-349頁

#### <受賞者の言葉>

このたびは、日本第四紀学会奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。今回賞を頂いた論文は、筆頭著者の丹羽が2007年3月に東京大学理学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。論文



丹羽雄一氏

の執筆にあたっては、指導教員である須貝俊彦先生には学部生時代から現在に至るまで熱心なご指導を頂きました。共著者の藤原 治博士、安江健一博士、田力正好博士、齋藤龍郎博士、大上隆史博士には多くのご助力を頂きました。投稿から受理に至るまで編集担当の小松原 琢博士、査読者の中西利典博士には有意義な助言を頂きました。論文の印刷にあたっては編集委員の皆様ならびに編集書記の綿引裕子様にご多大のお世話になりました。東京大学大学院須貝研究室の皆様には常日頃から励ましのお言葉を掛けて下さいました。ここに記して心よりお礼申し上げます。

受賞対象となった論文は、沖積平野で掘削された堆積物コアの層相・化学分析・ $^{14}\text{C}$ 年代測定結果から2時期の相対的海水準上昇イベントを検出し、それらが2回の歴史地震時の養老断層系の活動による沈降イベントに起

因する可能性を指摘したものです。これまで、活断層の活動履歴はトレンチ調査を主としたオンフォールト古地震学研究によって明らかにされてきましたが、コア堆積物から推定される堆積環境変化を指標として断層活動に伴う沈降イベントを検出する試みは限られています。コア堆積物の解析から地殻変動の証拠を検出する、という意欲的な姿勢を評価して頂いたことを大変うれしく思います。

今後は、オンフォールト古地震学研究によって得られた結果と受賞論文のようなオフフォールト古地震学研究で得られた結果を結び付けてより精度良く断層活動史を解明することが重要であると考えています。まだ課題は多く残っていますが、今回の受賞を励みに研究により一層精進したいと思っております。皆様のより一層のご指導・ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

## ◆第 19 回 INQUA 大会日本招致準備委員会活動報告

(1) 第 1 回会合を 2009 年 8 月 30 日 (日) に滋賀県立琵琶湖博物館で開催した (出席者 22 名)。役員 (委員長、副委員長、顧問、幹事) の選出を行ない、齋藤文紀会員が委員長に選出された。

(2) 第 2 回会合を 2010 年 2 月 21 日 (日) に日本大学文理学部で開催した (出席者 13 名)。会場候補地および学術テーマの検討を行った。

(3) 第 3 回会合を 2010 年 4 月 10 日 (土) に早稲田大学で開催した (出席者 17 名)。開催候補地および実施経費見積について検討した。

(4) 第 4 回会合を 2010 年 5 月 27 日 (木)

に幕張メッセ国際会議場で開催した (出席者 26 名)。会場候補地および学術テーマに関する検討を行なった。学術テーマについては各委員から 1 テーマを提案してもらうこととし、事務的な準備については、今後は幹事会で具体案を検討することとした。

(5) 第 1 回幹事会を 2010 年 6 月 18 日 (金) に日本大学文理学部で開催した (出席者 5 名)。日程、会場候補地、巡検コースについて検討した。

(6) 2010 年 7 月 23 日に招致意思表明の文書を INQUA 執行部に提出した (7 月 28 日に受領確認)。

## ◆第 19 回 INQUA 名古屋大会 (2015) へのご協力をお願い

日本第四紀学会・日本学術会議国際対応分科会 INQUA 国内委員会では、2015 年開催予定の第 19 回国際第四紀学連合 (INQUA) 大会を日本へ招致するための委員会を 2009 年 8 月に設置し、招致の準備を進めています。これまでに 4 回の招致準備委員会を開催し、学術テーマおよび開催地、組織等の検討を行ってきました。2010 年 7 月 23 日には INQUA 執行部に招致の提案を行い、名古屋国際会議場を開催地として 2011 年 5 月 1 日までに正式な提案文書を送付することになりました。ここにこれまでの概要を報告し、招致に向けて、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

### INQUA の概要

INQUA (International Union for Quaternary Research) = 国際第四紀学連合は、1928 年に設立された国際的な組織で、第四紀の環境変化を学際的に明らかにするために、国際的な共同研究や情報交換を促進する目的で設立されました。現在 50 弱の国や地域から構成されています。4 年に 1 回大会 (Congress) が開催されており、次回は 2011 年 7 月 20 ~ 27 日にスイスのベルンで、第 18 回大会が開催されます。

大会は、中日の 1 日巡検を含めて 1 週間の会期で通常開催され、大会の前後にそれぞれ 5 件から 10 件の巡検があります。参加者はおよそ 500 名から 1000 名で、前回のオーストラリア

のケアンズの大会では口頭とポスターを含めて約 1300 件の発表が行われました。10 弱のセッションが平行して行われ、日本からは過去数回は 30 名から 50 名が参加しています。大会は、通常 7 月下旬から 8 月の夏に開催されています。

大会の参加報告は、毎回「第四紀研究」に掲載されており、前回の報告は、第四紀研究、48 巻、1 号、19～44 ページに掲載されていますので、ご参照ください。

### INQUA 招致の手続き

INQUA の次の大会の決定は、直前の大会の会期中に開催される国際評議員会の投票で決定されます。分担金を支払っているメンバー（国または地域）からの代表者が、国際評議員会で投票し決定されます（約 35 ケ国・地域）。国際評議員会は会期中に 2～3 回開催され、開催提案を行った国からの発表の後、会期中に開催されるその次の国際評議員会で投票され、次の開催地が決定します。開催地の提案については、手続きが INQUA 理事会から 2010 年 4 月に公表されました。次のベルン大会の次の 2015 年の第 19 回大会については、招致の意思表示と連絡責任者の連絡の締め切りが 2010 年 8 月 1 日、正式な提案書（主催地、日程、テーマ名、組織委員会の構成、科学プログラムの概要、会場の概要、巡検の内容、登録料、学生や途上国からの参加者への支援、普及活動ほか）の締め切りが 2011 年 5 月 1 日となっています。

### 日本からの INQUA 招致

INQUA の大会は、1990 年に中国の北京で開催された第 13 回大会がアジアで開催された唯一の大会です。日本では今まで INQUA 大会は開催されていません。日本は、2003 年の INQUA 第 16 回大会（米国、リノ）で、正式に第 17 回大会の招致を行いました。オーストラリア（ケアンズ）、日本（東京）、イギリス（エジンバラ）の 3 つの提案の投票の結果、オーストラリアのケアンズに決まり、日本招致には至りませんでした。

### なぜ日本開催か

INQUA 大会を日本で開催することには、大きく 2 つの意味があるかと思います。第一は、日本の第四紀研究の成果とフィールドを直に世界の人に見てもらえる、知ってもらえることです。これまでの INQUA 大会では、日本からの参加者は 30 名から 50 名程度で、学会員の 5% にも及びません。日本の第四紀学に関係する研究者は優に 2000 名を超えています。その成果のほんの一部しか、INQUA 大会で報告されていません。なるべく多くの日本の第四紀研究者に参加してもらい、研究の成果を INQUA 日本大会で発表して頂きたい。世界に発信して頂きたい。そのような場を提供することができます。また日本には多くの面白いフィールドがあります。大会の巡検を通して、海外からの参加者から直に学び、また理解してもらえることは双方が得することです。更に、日本で開催される INQUA 大会をもとに、国際学術誌から特集号が出版され、日本の第四紀研究の成果が世界に発信される良い機会になればと思います。第二は、学際的な第四紀学の各分野の世界の最先端の研究を一同に聞くことができます。海外からは世界のトップの研究者を含めて、400 名から 600 名の人々が INQUA 大会に参加します。個別のシンポジウムと異なり、INQUA 大会では幅広いテーマを扱いますので、参加者の専門以外の第四紀学の世界の最先端の講演を直接聞くことができます。論文でしか見たことが無いような著名な研究者、現在学問を引っ張っているような若手研究者、また学生・ポスドクなど、海外から多様な研究者が参加します。これらの人たちとの交流は、今後の研究に大きく貢献するとともに、特に日本の若い人たちに大きな刺激となるかと思います。個々の専門のシンポジウムやワークショップと異なり、INQUA 大会は、幅広く第四紀学の最先端を学ぶことができます。学際的で、総合的な第四紀学では非常に重要なことです。次の世代の学問の発展のためにも、このような場を日本で設けることは大切です。以上の 2 点以外にも、日本で開催する意義は多々あるかと思います。アジアで 2 回目の INQUA 大会ですので、これを機に更にアジアの諸国との連携が深まることも期待できます。

### 招致準備委員会での検討結果

招致準備委員会では、昨年の 8 月以来、開催地（会場）、テーマ、体制などの検討を行ってきました。

開催地の選定では、JNTO（日本政府観光局）の協力を得て、国内の候補地の資料を収集し、費用、アクセス、会場の部屋等から検討してきました。この結果、約 10 の候補地から、札幌、つくば、新潟、名古屋、福岡の 5 ケ所を選考し、更に検討を行った結果、「名古屋国際会議場」を開催候補地とすることに決定致しました。開催費用、会場（部屋数、広さ）、海外や前後の巡検からのアクセス、宿泊施設、開催地からの資金援助（助成金）、INQUA 理事会からの要望、地元の支援体制などを検討した結果です。

開催時期については、お盆の時期を外して、2015年7月の最後の週の1週間を開催期間とし、この前後に巡検を実施する予定です。

INQUAの招致準備委員会は、8年前の誘致の時は、主に日本第四紀学会の会員から構成されていましたが、今回は各学協会からも委員をお願いし、できるだけ第四紀学に関してオールジャパンの体制がとれるようにしています。第四紀学に関係している研究者は日本第四紀学会のみならず他学会にも数多く所属しています。これらの現状をふまえて、国内の第四紀学の関係者の幅広い理解と協力を得るためです。現在約60名で構成されています。また日本第四紀学会から産業技術総合研究所の地質調査総合センター(GSJ)にINQUA招致に関する協力依頼を行い、GSJからご支援頂けることになっています。

大会のテーマについては、正式提案書で明示することが要求されています。テーマは、全体のテーマと個々の学問的なテーマの2種あります。過去の大会の全体のテーマは、

第16回 Reno: Shaping the Earth: A Quaternary Perspective

第17回 Cairns: The Tropics: Heat Engine of the Quaternary

第18回 Bern: Quaternary Sciences – the View from the Mountains

となっています。これまでの委員会で8件のテーマ案、9件の個別テーマが出されて議論されています。この中で、以下の3件が有望ですが、更に議論を行っていますので、新たなテーマ名、以下の3件へのご意見などをお聞かせください。

○ Quaternary Research for a Changing World

○ Quaternary Perspective on Climate Change, Natural Hazards and Civilization

○ Sustainable Living on the Active Earth: Implications from Quaternary Research

#### ご協力をお願い

来年の5月1日の正式提案に向けて、招致委員会では、正式提案書の作成準備を行っています。上記した主テーマ名や個別テーマ名に加えて、巡検候補地も記述する必要があります。是非、会員の皆様のご意見を招致委員会にお寄せ頂けますようお願い致します。大会に向けての活動に関すること、テーマ名など何でも結構です。送付先: [inqua2015-k\(at\)m.aist.go.jp](mailto:inqua2015-k(at)m.aist.go.jp)。また海外の研究者でお知り合いの方がいましたら、是非、19th INQUA Congress 2015 NAGOYA へのご協力をお願いして頂けますようお願い致します。

次回のINQUA大会は2011年7月20～27日にスイスのベルンです。是非多数の皆様に参加して頂けますようお願い致します。ベルン大会は2010年11月30日が要旨投稿の締め切りになっています。詳しくは大会のホームページをご覧ください。<http://www.inqua2011.ch/>

第19回INQUA大会の日本招致に向けて、ご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

第19回INQUA大会日本招致委員会 委員長 斎藤文紀 副委員長 遠藤邦彦、奥村晃史(委員会の名称は、第19回INQUA大会日本招致準備委員会でしたが、7月に提案を行ったことから準備を削除し、第19回INQUA大会日本招致委員会としました。)

## ◆ 2009年度研究委員会活動報告

■地球温暖化問題を検討する研究委員会(代表者:陶野郁雄)

1) 2009年12月19日に九州大学21世紀プラザにおいて、GCOE「自然共生社会を拓くアジア保全生態学」との共催で、シンポジウム「生物多様性からみた地球温暖化」を開催した。また、そのための打ち合わせや準備を行った。

2) 次年度、地盤工学会の地球温暖化に及ぼす影響に関する研究委員会や環境省の地球温暖化グループとの懇談会を行うための打ち合わせなどを行った。

■東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学研究委員会(代表者:小野昭)

2010年6月5日～6日にシンポジウム

「日本列島における酸素同位体ステージ3の古環境と現代人的行動の起源」を長野県御代田町浅間縄文ミュージアムで開催(浅間縄文ミュージアム・八ヶ岳旧石器研究グループと共同主催)。研究委員会メンバー10人が話題提供した。(本誌報告参照)

今までに本研究委員会のシンポジウムで報告した内容に韓国の研究者の論文も加えQuaternary International誌に特集号を編集集中である。

■古気候変動研究委員会(代表者:公文富士夫)

研究集会(「中部日本における更新世中・後期の編年と環境変動」:2010年5月1日、研究発表3件、信州大学理学部大会議室、川上

湖成層ボーリング試料の開示・試料採取;5月2日、現地見学会 八ヶ岳東南麓の中部更新統)を八ヶ岳団体研究グループと共同で開催し、計24名の参加を得て、八ヶ岳東南部の火山灰層序に関する知見を広げることができた。特に埋沢沿いの露頭と樋沢における学術ボーリング・コア試料との対応関係が確認され、今後の分析による解明が期待できる。

古気候、気候変動に関わる各種の情報の交換を行った。2009年度の地球惑星合同大会、日本地球化学会等の学術大会で古気候分野のセッションが開催され、多くの会員の参加があった。古気候変動研究委員会とは直接の関係はないが、PAGES研究集会(6月5日～6日:名古屋)も開催され、国内外における古気候研究についての情報交換が図られた。

■テフラ・火山研究委員会(代表者:長岡信治) 2008年～2010年にわたって東京で数回の会合を開き、INTAV国際野外集会“Active Tephra in Kyushu, 2010”の開催準備を行ってきた。2009年11月に2ndサーキュラーをHPに掲載し、参加登録および講演要旨の受付を2010年2月まで行った。さらに講演要旨に基づいて選定された12名(キャンセル1名を含む)の若手研究者の旅費の補助を決定した。

2010年5月9日～14日に鹿児島県霧島市シビックセンターにて、一日巡検(12

日、13日)を含む“Active Tephra in Kyushu, 2010”が開催され、11カ国から76名(日本人42名)が参加した。6人の研究者による招待講演と、48件の口頭発表と35件のポスター発表が行われた。14日にはINTAVの今後の活動方針と、2011年のINQUAベルン大会で提案するセッションについて議論された。ポスト巡検(5月15日～17日)には37名が参加し、阿蘇、雲仙、九重をめぐる、大規模火砕流の露頭を前に活発な討論がなされた。これらの報告を「第四紀通信」17巻4号に掲載した。なお、今回の研究集会で発表された研究は「Quaternary International」の特集号として出版される予定である。

■古地震・ネオテクトニクス研究委員会(代表者:吾妻 崇)

2008年岩手・宮城内陸地震の発生域および横手盆地東縁断層帯を対象として、2009年11月28日～29日に野外集会(参加者8名)を開催した。また、野外集会開催に先立ち、2009年11月20日に都内で事前談話会(参加者21名)を実施し、今泉俊文会員(横手盆地の活断層について)、田力正好会員(河成段丘からみた奥羽山脈周辺の地殻変動について)、八木浩司会員(2008年岩手・宮城内陸地震に伴う斜面災害)に話題提供をして頂いた。また、両企画に関するホームページを開設・運営した。

## ◆第四紀の新しい定義に関する特別委員会 報告

「第四紀の新しい定義に関する特別委員会」は2009年にIUGSによって批准された新しい第四紀の定義の日本における理解と普及を推進することを目的として日本第四紀学会2009年大会において設置を承認された。委員長奥村晃史、委員遠藤邦彦、斎藤文紀の体制で、日本学術会議地球惑星科学委員会INQUA分科会、INQUA国内委員会と協力して活動を行い、2010年1月22日に日本学術会議公開シンポジウム「人類の時代：第四紀

は残った」、1月31日に日本第四紀学会シンポジウム「第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する」において情報発信と議論を進めた。さらに、第四紀研究や関連学協会学会誌・会報等で新しい定義の普及に努めた。本特別委員会は、2010年秋に日本学術会議から公式の報告を発表することを目的として、活動を継続することを承認された。



## ◆第 21 期日本学術会議 地球惑星科学委員会 INQUA 分科会報告

(1) 第 21 期第 3 回 INQUA 分科会  
 日時：2009 年 12 月 29 日 13:00 ~ 15:40  
 場所：日本地質学会事務局  
 出席者 INQUA 分科会：田村俊和、渡邊眞紀子、  
 奥村晃史、鈴木毅彦  
 オブザーバー：  
 INQUA 国内委員：町田 洋、小野 昭、斎藤  
 文紀、太田陽子、遠藤邦彦  
 IUGS 分科会：北里 洋、斎藤靖二、西脇二一  
 日本地質学会：天野一男、井龍康文  
 日本第四紀学会：吾妻 崇  
 議題 1. 前回議事録(案)の確認  
 議題 2. 第四紀の新しい定義について 資料 2  
 のような第四紀の新しい地位と定義、および  
 関連する地質時代の呼称等を日本で用いるこ  
 とを同意した。今後地球惑星科学研究者、応  
 用地質実務者、教育関係者等から幅広く意見  
 を求めて日本学術会議の報告をとりまとめ、  
 普及と広報につとめることとした。  
 (2) 日本学術会議公開シンポジウム『人類の  
 時代—第四紀は残った』

日本学術会議 IUGS 分科会・INQUA 分科会・  
 日本地質学会・日本第四紀学会 共催  
 日時：1 月 22 日(金) 10 時~ 17 時 15 分  
 場所：日本学術会議講堂  
 新しい第四紀の地位と定義を確認し、日本  
 への受容と普及を図るための公開シンポジウ  
 ムを開催した。参加者は 150 名余りで活発な  
 議論が行われた。  
 (3) 第 19 回 INQUA 大会日本招致準備  
 第 19 回 INQUA 大会日本招致準備委員会に  
 おいて日本第四紀学会・INQUA 国内委員会・  
 関連学協会とともに 2015 年 INQUA 大会を  
 日本へ招致するための準備を進めた。開催  
 地の選定を進めるとともに、2010 年 8 月末  
 INQUA 執行部に対し、招致の意思表示を行っ  
 た。  
 (4) 第四紀の新しい定義の普及  
 関連学協会の会誌・ニュースレター等に解  
 説記事を投稿して、地球惑星科学関連の広い  
 分野への広報を行った。日本学術会議からの  
 公式な報告を準備中である。

### ◆日本沙漠学会 2010 年秋季シンポジウム

主催：日本沙漠学会・同沙漠誌分科会 共催：奈良女子大学共生科学研究センター  
 後援：日本第四紀学会

テーマ：最近 50 ~ 60 年間ににおける農牧業の変容と課題  
 —中央アジアから中国・モンゴルの乾燥・半乾燥地域を例として—  
 日時：2010 年 10 月 16 日(土) 午後 1 時 30 分から午後 5 時まで(予定)  
 (終了後、簡単な懇親会)  
 場所：奈良女子大学(奈良市。近鉄奈良駅から徒歩 5 分ほど)

#### 【話題提供者とタイトル】

渡邊三津子(総合地球環境学研究所)：カザフスタン共和国アルマトウ州におけるポスト社  
 会主義時代の農牧業 (13:35 ~ 14:15)  
 古澤 文(奈良女子大大学院生)：中国タリム盆地オアシスにおける温室栽培の現状、およ  
 び課題の模索—カシュガル市を事例に— (14:15 ~ 14:55)  
 (休憩：14:55 ~ 15:10)  
 中村知子(東北大学東北アジア研究センター)：中国における農業の市場経済化とその影響  
 —甘肅省黒河流域地域を例に— (15:10 ~ 15:50)  
 小宮山 博(国際農林水産業研究センター)：モンゴル国農牧業の激動の半世紀とその将来  
 展望 (15:50 ~ 16:30)  
 総合討論：16:30 ~ 17:00

#### 【実行委員会責任者・連絡先】

委員長：相馬秀廣(奈良女子大学) hsohma(at)cc.nara-wu.ac.jp Tel：0742-20-3324  
 事務局幹事：高田将志(奈良女子大学) takada(at)cc.nara-wu.ac.jp Tel：0742-20-3323  
 なお、懇親会(3000 円程度)に参加希望の場合、上記メールアドレスへ、10 月 9 日(金)  
 までに連絡願います。

## ◆ 2010 年度第 1 回評議員会議事録

日時：2010 年 8 月 20 日（金） 17:25 ～ 19:45

場所：東京学芸大学・本部棟 3 階 第一会議室

議長：海津正倫

出席：遠藤邦彦（会長）、竹村恵二（副会長）、小野 昭（副会長）、吾妻 崇、五十嵐八枝子、池田明彦、海津正倫、奥村晃史、荻谷愛彦、久保純子、公文富士夫、斎藤文紀、里口保文、須貝俊彦、陶野郁雄、兵頭政幸、松浦秀治、松下まり子、松島義章、三浦英樹、水野清秀、三田村宗樹、宮内崇裕、百原 新、山崎晴雄、横山祐典、吉川周作

このほか熊井久雄（元会長）、植木岳雪（幹事）、高田将志（幹事）、中野利洋（事務局）が出席。

記録：吾妻 崇

久保純子行事幹事の司会で、遠藤邦彦会長あいさつの後、海津正倫評議員を議長に選出し、定数確認の後、配布資料に基づき下記報告・審議を行った。報告・審議事項はそれぞれ担当の幹事により説明が行われた。

### I 報告事項

#### 1. 2009 年度活動報告

1-1 庶務（庶務幹事：吾妻 崇、三田村宗樹、渡邊眞紀子）

1) 会員動向（2010 年 7 月 31 日現在）：正会員 1,379 名（うち学生費会員 48 名、海外会員 11 名を含む）、名誉会員 10 名、賛助会員 11 社。逝去会員、羽鳥謙三氏（2009 年 9 月 2 日）について報告し、黙祷をささげた。

2) 総会・評議員会・幹事会の開催：2009 年度第 1 回評議員会を 2009 年 8 月 28 日に滋賀県立琵琶湖博物館で開催した（出席者 31 名、委任状 9 通。議長：竹村恵二）。2009 年度総会を 2009 年 8 月 29 日に滋賀県立琵琶湖博物館において開催した（出席者 91 名、委任状 119 通。議長：兵頭政幸）。議事録をそれぞれ「第四紀通信」16 巻 5 号に掲載した。2009 年度第 2 回評議員会を 2010 年 1 月 31 日に早稲田大学において開催した（出席者 33 名、委任状 7 通、議長：宮内崇裕）。議事録を「第四紀通信」17 巻 2 号に掲載した。2009 年度第 3 回評議員会を 2010 年 6 月 19 日に早稲田大学で開催した（出席者 21 名、委任状 16 通、議長：池田明彦）。議事録を「第四紀通信」17 巻 4 号に掲載した。幹事会を 7 回開催し、議事録をそれぞれ「第四紀通信」に掲載した。

3) 法務委員会規定の改定を行ない、法務委員会を設置した。（「第四紀通信」17 巻 3 号に掲載）

4) 名誉会員を選考した（審議事項 3 参照）。

5) 2010 年日本第四紀学会賞および学術賞の選考を行った（報告事項 4 ならびに本号「2010 年日本第四紀学会賞・学術賞選考報告」参照）。

6) 2010 年日本第四紀学会論文賞および奨励賞の選考を行った（報告事項 5 ならびに本号「2010 年日本第四紀学会論文賞・奨励賞選考報告」参照）。

7) 功労賞の候補者とその決め方について検討を

行った。

8) 役員補充選挙を行った。

9) 会長推薦幹事を追加した。

10) 転載許可の受付（11 件）を行った。

11) 寄贈図書受付、整理を行い、管理方法の検討を行った。

12) 学会・シンポジウム等の共催・後援を行った：北淡活断層シンポジウム 2010（後援：2010 年 1 月 17 ～ 21 日）、日本ジオパーク糸魚川大会（後援：2010 年 8 月 22 ～ 23 日）、第 54 回粘土科学討論会（共催：2010 年 9 月 6 ～ 8 日）、日本地質学会関東支部 2010 年秋季シンポジウム（共催：2010 年 11 月 22 ～ 23 日）

13) 50 周年記念出版物「デジタルブック最新第四紀学」を刊行し、会員向け販売を実施した。

14) 役員数の見直しおよび分野別定数の改定などに関する学会運営体制の検討を行った。

#### 1-2 行事（行事幹事：久保純子）

1) 日本第四紀学会 2009 年大会を 8 月 28 日（金）～ 8 月 30 日（日）に滋賀県立琵琶湖博物館において開催した（大会実行委員会委員長：高橋啓一、事務局：里口保文）。8 月 28 日・29 日に一般研究発表を行い、口頭 40 件、ポスター 31 件、合計 71 件の研究発表が行われた。また、28 日夕方に評議員会、29 日に総会を行った。30 日には、シンポジウム「古環境変動へ貢献する湖沼堆積物研究の役割」を開催し、8 件の発表が行われた。同日の午後には、普及講演会「琵琶湖堆積物がつむぐ過去から未来へのメッセージ」を開催し、竹村恵二会員、高原 光会員による一般市民を対象とした講演があった。大会の参加者は、3 日間を通して、217 名（会員 157 名、非会員 60 名）であった。また、31 日には、「琵琶湖西岸地域の地形・地質、そしてその影響」と題する巡検が行われ、23 名が参加した。大会の報告は「第四紀通信」第 16 巻 5 号（2009 年 10 月）に掲載された（鈴木前行事幹事執筆）。

2) 2009 年度第 1 回日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会を、2010 年 1 月 31 日（日）に早稲田大学 22 号館にて開催し、160 名以上が参加した（同日はシンポジウム「第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス」もあわせて開催）。第 1 回講演会では受賞者 2 名（学術賞受賞者斎藤文紀会員、学会賞受賞者町田 洋前会長）による講演が行われた。講演会の報告は「第四紀通信」第 17 巻 2 号（2010 年 4 月）に掲載された（参加大学院生執筆）。

3) 2009 年度第 2 回学会賞・学術賞受賞者講演会を、2010 年 6 月 19 日（土）に早稲田大学 22 号館にて実施し、受賞者 2 名（学術賞受賞者小疇尚会員、学会賞受賞者小野 昭副会長）による講演が行われた。参加者は 92 名であった（同日午後にはシンポジウム「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」も開催）。講演会の報告は「第四紀通信」第 17 巻 4 号（2010 年 8 月）に掲載予定である（参加大学院生執筆）。

4) 日本第四紀学会 2010 年大会の準備を行った。大会の日程は、2010 年 8 月 20 日（金）～22 日（日）、会場は東京学芸大学芸術館ホールほかの予定である。8 月 20 日（金）・21 日（土）に一般研究発表、総会、学会賞・学術賞受賞者講演会（第 1 回）、懇親会を、22 日（日）にシンポジウム「自然史の教育と研究をすすめるために一さまざまな分野からの取り組み」を開催の予定である。また、8 月 23 日（月）に、野外巡検「里山景観の違いを探る一地生態学の視点から一」を予定している。実行委員会は、小泉武栄会員（委員長）、目代邦康会員（事務局長）を中心に編成され、大会の準備をおこなっている。

5) 学会賞・学術賞受賞者講演会（第 1 回）は大会開催時の 2010 年 8 月 21 日（土）に実施し、学会賞受賞者の多田隆治会員と学術賞受賞者の鈴木毅彦会員の講演を予定している。

6) 学会賞・学術賞受賞者講演会（第 2 回）は 2011 年 1 月に関西地区で開催の予定であり、学会賞受賞者の岡田篤正会員・吉川周作会員の講演を企画中である（当日は評議員会およびシンポジウムも開催の予定）。

7) 日本第四紀学会 2011 年大会は 2011 年 8 月に徳島地区において開催で調整中である。また、2012 年大会は立正大学ほか、2013 年大会は長崎大学ほかで調整中である。

### 1-3 編集（編集幹事：池原 研・長橋良隆）

1) 第四紀研究第 48 巻 5 号（論説 4 編、62 ページ）、6 号（学会賞受賞記念論文 1 編、論説 4 編、書評 1 編、63 ページ）、第 49 巻 1 号（学会賞受賞記念論文 1 編、論説 2 編、短報 1 編、書評 1 編、投稿規定など、54 ページ）、2 号（論説 1 編、雑録 1 編、書評 2 編、28 ページ）、3 号（「古環境変動の解明へ貢献する湖沼堆積物の役割」特集号；趣旨説明 1 編、論説・総説 8 編、108 ページ）、4 号（論説 2 編、短報 1 編、資料 1 編、書評 1 編、50 ページ）で、合計 6 冊 365 ページを刊行した。ページ数は前年度より 80 ページ程度減少した。

2) 滋賀琵琶湖大会特集号は第 49 巻 3 号にて刊行された。

3) 2010 年 1 月シンポジウム「第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する」の特集を組むこととした。第 49 巻 5 号を予定。

4) 日本第四紀学会賞・学術賞受賞者に記念論文原稿の投稿を依頼し、2008 年学会賞 2 名については第 48 巻 6 号、第 49 巻 1 号で記念論文を掲載した。2008 年学術賞受賞者からの原稿は受付済みで現在修正依頼中であり、修正後受理され次第、掲載となる見込みである。2009 年受賞者には原稿投稿の依頼済みである。

5) 7 月 25 日現在、受理済みは 13 編（論説 2 編、総説 8 編、書評 3 編）で第 49 巻 5 号以降に順次掲載の予定である。手持ち原稿は 23 編（論説 14 編、短報 6 編、総説 1 編、資料 2 編）。論文投稿数は、2010 年に入ってから 27 編（書評を除く）で、今年の同時期（16 編）を大幅に上回る。これは

2010 年 1 月のシンポジウムの特集への原稿（7 編）と学術賞受賞記念論文 2 編、第四紀境界の変更に関する雑録 1 編の投稿によるものであり、一般投稿はほぼ昨年と同様である。2009 年の投稿件数は 27 編（特集号を除く）であり、2008 年とほぼ同数である。以上の事実は一般投稿数がここ数年ほぼ横ばいになっていることを示している。取り下げ・掲載不可となったのは 4 編、投稿受付から刊行までにかかった時間は、短いもので 8 か月弱であった。

6) 編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めた。また、完成度の高い論文の作成を「編集委員会だより」にて呼びかけた。

7) J-STAGE による電子ジャーナル化を行っている。刊行後 1 年以内の号についての全文閲覧は、会員のみ利用可能であり、ID とパスワードにて管理される。アブストラクトと刊行後 1 年以上経過した号の閲覧については、会員外も含めて利用可能である。

8) 2008 年度に採択された JST による電子アーカイブ化事業（Journal(at)rchive）による「第四紀研究」第 1 巻から第 44 巻までの電子媒体での公開は、2009 年 8 月 21 日に実施された。

9) 執筆要項の引用文献の記載方法の変更（号表記なので、no. を入れる）。

多田文男（1975）日本における砂丘研究史。日本第四紀学会講演要旨集、4、25-26。 →  
多田文男（1975）日本における砂丘研究史。日本第四紀学会講演要旨集、no.4、25-26。

### 1-4 広報（広報幹事：荻谷愛彦）

1) 「第四紀通信（QR News Letter）」Vol.16 No.5（2009 年 10 月）、同 No.6（2009 年 12 月）、Vol.17 No.1（2010 年 2 月）、同 No.2（2010 年 4 月）、同 No.3（2010 年 6 月）および同 No.4（2010 年 8 月）を刊行した。

2) 「第四紀通信」上記各号の電子版（pdf 形式）を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

3) 日本第四紀学会ホームページを通じて各種の広報・普及活動を行った。主なものは、「第四紀通信電子版」の掲載のほか、①本学会 2010 年大会の情報提供、②本学会主催行事（シンポジウム、講演会等）の情報提供、③「第四紀研究」の目次掲載、④ INQUA ベルン大会の情報提供、⑤各種公募・助成情報の掲載、⑥他学会等による各種イベント情報等の提供である。

4) 日本第四紀学会会員メーリングリスト（通称：jaqua-ml）を通じ、大会、講演会、シンポジウム、研究集会、公募・助成等の連絡や情報提供を行った。2009 年 9 月～2010 年 7 月中旬のメーリングリスト投稿数は約 120 件で、昨年同期より約 2 割増えた。2010 年 7 月中旬の登録会員数は約 1000 名である。

5) 日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行った。

6) 日本第四紀学会評議員会メーリングリスト

の管理を行った。

#### 1-5 渉外（渉外幹事：須貝俊彦）

1) 一般社団法人日本地球惑星科学連合：法人化後初の代議員選挙が実施され（投票締切り 10 月 30 日）、5 つのセクションから以下の 15 名の第四紀学会会員が当選した；大気海洋・環境科学：多田隆治、中塚 武。地球人間圏科学：小口 高、奥村晃史、須貝俊彦、鈴木毅彦、春山成子、松本 淳、目代邦康。固体地球科学：伊藤谷生。地球生命科学：井龍康文、川幡穂高、北村晃寿。地球惑星科学総合：小松美加、中井睦美。日本地球惑星科学連合 2010 年大会が 2010 年 5 月 23 日～28 日に幕張メッセで開催され、167 件のセッション（うち国際セッション 32 件）に対して 3,685 件の発表があり（前年比 597 件増）、5,746 名が参加した（同 939 名増）。日本第四紀学会が単独で提案母体となっている第四紀学セッションとして、従来の『第四紀』を引継ぐ『ヒト—環境系の時系列ダイナミクス』が実施され、46 件（口頭 18 件、ポスター 28 件）の発表がなされた。もうひとつの第四紀学セッションである『沖積層研究の新展開』、日本第四紀学会が地震学会と共同提案したセッション『活断層・古地震』をはじめ第四紀学に関連する多数のセッションが設けられた。『ヒト—環境系の時系列ダイナミクス』については、昨年と同様、関連深い 4 つの古気候・古環境セッション『海と陸の気候—過去から現代までの変動解明へのアプローチ』『低緯度域の気候変動と間接指標の開発』『古気候・古海洋変動』『氷床・氷河コアと古環境変動』との連続開催が実現した。

2) 自然史学会連合：平成 21 年度の連合の講演会「未来に残したい日本海域の自然史遺産」が 2009 年 11 月 7、8 日に石川県立自然史資料館で開催された。2009 年 12 月 19 日に国立科学博物館分館で 2009 年度総会が開催された。新役員選出、2008 年度決算、2009 年度会計経過報告、2010 年度予算案と事業計画について審議承認された〔須貝出席〕。

3) 「地質の日」事業推進委員会：第 3 回「地質の日」事業推進委員会が 10 月 20 日に日本地質学会事務局で開催された。本年の事業推進委員会の活動のまとめと会計報告がなされた。2009 年度の「地質の日」関連事業として、全国 60 の機関・団体で 98 のイベントが開催され、参加者数合計は 260,433 人となった。

4) PAGES-J 国内委員会：環境学委員会・地球惑星科学委員会 IGBP・WCRP 合同分科会 PAGES 小委員会（第 21 期・第 1 回）が 1 月 9 日東京大学海洋研究所で開催された〔須貝代理出席〕。2010 年 6 月 5、6 日（日）名古屋大にて PAGES Regional WS が開催された。IGBP/PAGES では、世界中で並行して進めている過去 2000 年間の気候変動に関するデータの取りまとめに向けた PAGES 2K Initiative <http://www.pages-igbp.org/science/last2millennia.html> の一環として、8 月 26～27 日に名古屋大で「第 1 回 Asia 2K Workshop」を開催予定。

5) IGU 京都地域会議準備委員会に学会代表委員

として加藤茂弘会員が参加した。

6) 惑星地球科学連合環境・災害対応委員会が 2010 年 5 月 28 日（金）に幕張メッセ国際会議場で開催され、学会代表委員として田力正好会員が出席した。

#### 1-6 企画（企画幹事：植木岳雪・高田将志）

1) 第 1 回シンポジウム「第四紀の開始期の環境変動とテクトニクス：第四紀の新定義を検証する」を学会が企画し、2010 年 1 月 31 日（日）午後に早稲田大学にて開催した。新しい第四紀の定義と第四紀開始期の環境変動、生物、人類、テクトニクスに関する 8 名の講演と総合討論が行われた。全部で約 170 名、非会員は約 60 名の参加があり、大変盛況であった。シンポジウムの内容については、「第四紀研究」に特集として掲載の予定である。シンポジウムの報告は「第四紀通信」17 巻 2 号（2010 年 4 月）に掲載された（植木企画幹事執筆）。

2) 第 2 回シンポジウム「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」を学会が企画し、地学教育学会、日本理科教育学会、日本科学教育学会と共催で、2010 年 6 月 19 日（土）午後に早稲田大学にて開催した。日本地質学会、日本地球惑星科学連合、早稲田大学教育・総合科学学術院の後援を得た。地学教育・理科教育・科学教育に関する 12 名の講演と、5 名によるコメントおよび総合討論が行われた。全部で 114 名、非会員は 66 名の参加があり、大変盛況であった。シンポジウムの内容については、「第四紀研究」の特別号として掲載する方向で準備が進められている。シンポジウムの報告は「第四紀通信」17 巻 4 号（2010 年 8 月）に掲載された（植木企画幹事、神奈川県立相模原青陵高校・小尾 靖氏、早稲田大学大学院西口達也氏執筆）。

3) 本年度第 1 回の講習会「地形と地層を見る目を実験で磨こう」を、2010 年 3 月 8 日（月）に東京学芸大学で実施した。講師は元筑波大学の池田 宏氏で、さまざまな地形実験を室内で行った。参加者は 30 名で、事前に定員に達し締め切りとなった。参加者には学生が多く、平日にもかかわらず大変盛況であった。講習会の報告は「第四紀通信」17 巻 3 号（2010 年 6 月）に掲載された（秋田大学教育文化学部・川村教一氏執筆）。

2. 2009 年度決算報告・会計監査報告（本号資料 1「2009 年度収支決算報告」、資料 2「貸借対照表」、資料 3「2009 年度会計監査報告」、資料 5「2009 年度業務委託費」参照）

吾妻庶務幹事より配布資料に基づき説明があった。続いて、2009 年度の会計が適正に運用されていたことを確認した旨、松浦会計監査より報告があった。

3. 研究委員会報告（本号「2009 年度研究委員会活動報告」参照）

地球温暖化問題を検討する研究委員会（代表者：陶野郁雄）、東アジアにおける酸素同位体ステージ 3 の環境変動と考古学研究委員会（代表者：小野

昭)、気候変動研究委員会(代表者:公文富士夫)、古地震・ネオテクトニクス研究委員会(代表者:吾妻 崇)、テフラ・火山研究委員会(代表者:長岡信治)について、資料にもとづき、代表者または委員会メンバーから委員会活動について報告が行われた。

#### 4. 学会賞・学術賞受賞者選考報告

第3回評議員会で決定した学会賞・学術賞の選考報告について、百原幹事長より経緯の説明が行われた。(「2010年日本第四紀学会学会賞・学術賞選考報告」参照)

#### 5. 論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

第3回評議員会で決定した論文賞・奨励賞の選考報告について、百原幹事長より経緯の説明が行われた。(「2010年日本第四紀学会論文賞・奨励賞選考報告」参照)

#### 6. 第19回 INQUA 大会日本招致準備委員会活動報告(本号「第19回 INQUA 大会日本招致準備委員会活動報告」参照)

斎藤文紀委員長より、資料にもとづき活動報告が行われた。また、開催候補地を名古屋とすることについて検討し、承認された。

#### 7. 第四紀の新しい定義に関する特別委員会活動報告

奥村晃史委員長より口頭にて活動報告が行われた。

#### 8. 第21期日本学術会議 地球惑星科学委員会 INQUA 分科会報告

奥村晃史 INQUA 分科会委員長より、資料にもとづき活動報告が行われた。

## II 審議事項

### 1. 2010年度事業計画

#### 1-1 庶務

- 1) 総会・評議員会・幹事会を開催する。
- 2) 選挙管理委員会を組織し、2011～2012年度役員選挙を実施する。
- 3) 会員名簿の管理および発行を行う。
- 4) 学会賞・学術賞受賞者選考および論文賞・奨励賞受賞者選考に関する業務を行う。
- 5) 功労賞選考に関する業務を行う。
- 6) 転載許可・受け入れ図書の整理を行う。
- 7) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- 8) 日本学術振興会賞などの賞への学会推薦を行う。
- 9) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

#### 1-2 会計

- 1) 研究委員会の予算の調整を行う。
- 2) その他会計に関する業務を行う。

#### 1-3 行事

1) 2010年8月20日～22日に東京学芸大学を会場として、日本第四紀学会2010年大会を実施する。

2) 学会賞・学術賞受賞者講演会(第1回)を大会開催時の2010年8月21日(土)に実施する(講演者は学会賞受賞者の多田隆治会員と学術賞受賞者の鈴木毅彦会員を予定)。

3) 学会賞・学術賞受賞者講演会(第2回)を2011年1月に関西地区で開催する(講演者は学会賞受賞者の岡田篤正会員と吉川周作会員を予定)。当日は評議員会およびシンポジウムも開催の予定である。

4) 日本第四紀学会2011年大会を2011年8月26日(金)～29日(月)を候補として、徳島地域にて開催する。鳴門教育大学、徳島大学、徳島県立博物館の会員を中心に実行委員会を組織する。

5) 2012年以降の日本第四紀学会大会の準備を行う。

#### 1-4 編集

1) 2009～2010年度編集委員会を組織し、第四紀研究の編集にあたる。

2) 「第四紀研究」第49巻5号、6号、第50巻1号、2号、3号、4号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGEを通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。

3) 2010年大会シンポジウム特集号編集委員会を設置し、企画・編集などにあたる。

4) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

#### 1-5 広報

1) 広報委員会を組織して、第四紀通信の編集およびホームページの維持管理を行う。

2) 「第四紀通信(QR News Letter)」Vol.17 No.5(2010年10月)、同No.6(2010年12月)、Vol.18 No.1(2011年2月)、同No.2(2011年4月)、同No.3(2011年6月)および同No.4(2011年8月)を発行する。

3) 「第四紀通信」上記各号の電子版(pdf版)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。

4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。

5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。

6) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行う。

7) 日本第四紀学会ホームページ英語版の充実を図る。

#### 1-6 渉外

1) 日本地球惑星科学連合大会を引き続き共催し、日本第四紀学会が単独でセッション提案母体となっている『ヒト-環境系の時系列ダイナミクス』、日本地質学会と共同開催で提案している『沖

積層研究の新展開』、日本地質学会・日本地震学会・日本活断層学会と共同開催で提案している『活断層と古地震』の各セッションを継続するとともに、新規セッションの開催、共催、古環境変動に関連するセッションの統合を推進する。

2) 日本地球惑星科学連合の加盟学会として、関連他学会と協調して活動をすすめる。

3) 日本第四紀学会として、加盟学会連合である自然史学会連合、地質科学関連学協会、地球環境科学関連学会協議会、「地質の日」事業推進委員会、日本ジオパーク委員会に積極的に参加し、その活動の一翼を担う。

#### 1-7 企画

1) 2010年9月9日(木)～11日(土)に同志社大学にて、第1回の講習会「沖積層：その堆積物・堆積システム・堆積シーケンスの解析法の基礎」を開催する予定である。講師は同志社大学の増田富士雄氏、谷口圭輔氏、福岡大学の石原与四郎氏、産総研の佐藤智之氏、奈良女子大学の高田将志氏。

2) 2011年1月に、学会主催のシンポジウムを企画し開催する。場所は関西の予定。

3) 2011年3月に講習会を企画し開催する。場所は関東の予定。

#### 2. 2010年度予算

資料4「2010年度予算案」、資料6「2010年度業務委託費見積」に基づき、吾妻庶務幹事から説明があり、承認された。

#### 3. 名誉会員の決定(本号掲載「新名誉会員の紹介」参照)

第3回評議員会で決定した3名の名誉会員候補者および推薦理由について百原幹事長から説明があり、資料を一部修正した上で総会に提出することが確認された。

#### 4. 名誉会員に関する会則の一部改正

1) 名誉会員が総会に参加し、発言できるように会則の第8条の後に第9条として下記の文章を追加することが幹事会より提案され、承認された。

(現行会則)

「第8条

総会は正会員をもって組織し、欠席した正会員の委任状を含み全正会員の10分の1以上の出席がなければ、成立しない。出席した正会員は2名以上の欠席した正会員の委任を受けることは出来ない。総会は各年度につき1回以上会長が招集し、本会の基本方針を決定する。」

(改正案)

「第8条

総会は正会員をもって組織し、欠席した正会員の委任状を含み全正会員の10分の1以上の出席がなければ、成立しない。出席した正会員は2名以上の欠席した正会員の委任を受けることは出来ない。総会は各年度につき1回以上会長が招集し、本会の基本方針を決定する。」

#### 第9条

名誉会員は総会に参加し、意見を述べるができる。」

2) 事務局業務を委託している春恒社の移転に伴い、付則1の付則1の本会事務局の所在地を、「東京都新宿区大久保2丁目4番地12号(〒169-0072) 新宿ラムダックスビル10階」に変更した。

#### 5. 顕彰関係の規定および内規の一部改正

学会賞等の授与式は、これまで総会閉会後に開催されてきたので、現状にあわせて学会賞規定の一部を下記の通り改正することが幹事会より提案され、承認された。

各賞の受賞者候補者の選考スケジュールを早めるため、「学会賞と学術賞選考に関する内規」および「論文賞と奨励賞選考に関する内規」の一部を下記のとおり改正することが幹事会より提案され、承認された。

##### 1) 「学会賞規定」

(現行規定)

「第15条 授賞式は総会で行い、学会賞、学術賞、功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を、奨励賞受賞者へは賞状及び副賞〈賞金〉を授与する。」

(改正案)

「第15条 授賞式は総会にあわせて行い、学会賞、学術賞、功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を、奨励賞受賞者へは賞状及び副賞〈賞金〉を授与する。」

##### 2) 「学会賞と学術賞選考に関する内規」

(現行内規)

「11. 学会賞選考委員会は、授与年の3月末日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。」

(改正案)

「11. 学会賞選考委員会は、幹事会が定める期日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。」

##### 3) 「論文賞・奨励賞選考に関する内規」

(現行内規)

「8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。」

(改正案)

「8. 受賞候補者の推薦書類は、幹事会が定める期日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。」

#### 6. その他

##### 6-1 幹事の交代

久保純子行事幹事が長期にわたり国外出張するため、三浦英樹会員が久保幹事に代わって幹事になることが承認された。



資料（１） 2009年度収支決算報告書  
 (2009年8月1日から2010年7月31日)

## 収入の部

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会費収入	12,900,000	12,294,310	-605,690	
正会員会費収入	12,600,000	12,014,310	-585,690	通常会員(過年度)会費 11,755,000円(873,000円) 学生会員会費 185,000円 海外会員会費 74,310円
賛助会員会費収入	300,000	280,000	-20,000	20,000円×11社(14口)
誌代	2,000,000	1,620,848	-379,152	定期雑誌購入, Back No., 要旨集売上
別刷代・超過頁代収入	800,000	832,072	32,072	第四紀研究 48巻3号～49巻3号
雑収入	700,000	1,182,064	482,064	デジタルブック収入705860円、2009年大会余剰金273509円
利子収入	10,000	29,800	19,800	普通預金利息
収入合計	16,410,000	15,959,094	-450,906	
前期繰越金	7,910,134	7,910,134	0	
合計	24,320,134	23,869,228	-450,906	

## 支出の部

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会誌発行費	7,040,000	7,372,790	-332,790	
印刷費	4,000,000	4,019,925	-19,925	第四紀研究 48巻3号～49巻3号
編集費	1,000,000	1,478,078	-478,078	
編集人件費	1,440,000	1,440,000	0	編集書記人件費
別刷印刷費	600,000	434,787	165,213	第四紀研究 48巻3号～49巻3号
会誌・会報送費	1,000,000	905,647	94,353	第四紀研究 48巻3号～49巻3号, 追加発送
会報発行費	910,000	919,656	-9,656	
印刷費	700,000	696,360	3,640	第四紀通信 16巻4号～17巻3号
編集費	10,000	9,146	854	
編集人件費	200,000	214,150	-14,150	会報編集人件費
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2010年用(東京学芸大学)
巡検準備金	100,000	100,000	0	2010年用(東京学芸大学)
講演会・シホ'ゾム費	200,000	286,652	-86,652	講師交通費(6月シンポジウム)143180円
予稿集印刷費	500,000	457,168	42,832	2009年大会(本冊300部)
学会賞費	200,000	190,065	9,935	副賞および賞状筆耕代
講習会費	100,000	20,000	80,000	
通信費	300,000	334,130	-34,130	会費請求書発送郵送費等
会議費	100,000	53,822	46,178	
旅費・交通費	450,000	639,710	-189,710	
印刷費	400,000	322,275	77,725	総会資料, 封筒代, コピー代等
業務委託費	2,943,990	2,870,411	73,579	資料(5)参照
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	2,000,000	948,791	1,051,209	CD-ROM作成費(500部)577500円、CD出版著作権支 払立替分183448円
INQUA対策費	100,000	110,800	-10,800	
役員選挙費	0	55,094	-55,094	2009-2010年度役員補充選挙
INQUA対策積立金繰入支出	100,000	100,000	0	
役員選挙費積立金繰入支出	350,000	350,000	0	
名簿作成積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
研究委員会助成金支出	250,000	74,212	175,788	
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	0	地球惑星科学連合、自然科学連合分担金
特別委員会活動費	100,000	0	100,000	
雑費	100,000	88,290	11,710	振込手数料 他
予備費	200,000	12,300	187,700	会報編集書記用プリンター
支出合計	18,873,990	17,641,813	1,232,177	
次期繰越金	5,446,144	6,227,415	-781,271	
合計	24,320,134	23,869,228	450,906	

## 資料(2) 貸借対照表および財産目録

貸借対照表  
(2010年7月31日現在)

(単位:円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産	6,486,415	流動負債	259,000
小口現金	423,481	前受会費	259,000
現金(事務局)	20,522		
郵便振替	3,855,500	正味財産	17,377,415
普通預金	2,156,912	名簿作成積立金	1,000,000
未収金	30,000	INQUA対策積立金	300,000
		役員選挙費積立金	350,000
固定資産	11,150,000	予備費積立金	9,500,000
定期預金	11,150,000	次期繰越金	6,227,415
		(前期繰越金)	7,910,134
		(当期収支差額)	-1,682,719
合計	17,636,415	合計	17,636,415

財産目録  
(2010年7月31日現在)

(単位:円)

資産の部		金額
科目	摘要	金額
小口現金	編集書記手許金	423,481
現金	事務局手許金	20,522
郵便振替	年会費振込専用口座	3,855,500
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	1,474,241
普通預金	中央三井信託銀行本店営業部	682,671
未収金	日本第四紀学会会員名簿広告料	30,000
流動資産合計		6,486,415
定期預金	みずほ銀行早稲田支店(名簿作成、INQUA対策、役員選挙積立金)	1,650,000
定期預金	中央三井信託銀行本店営業部(予備費積立金)	9,500,000
固定資産合計		11,150,000
合計		17,636,415

## 負債の部 (単位:円)

科目	摘要	金額
前受会費	2010年度以降年会費	259,000
合計		259,000

## 正味財産の部 (単位:円)

科目	摘要	金額
名簿作成積立金	2010年度名簿作成積立金	1,000,000
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	300,000
役員選挙費積立金	役員選挙費積立金	350,000
予備費積立金	予備費積立金	9,500,000
次期繰越金		6,227,415
	前期繰越金	7,910,134
	当期収支差額	-1,682,719
合計		17,377,415

資料(3)

日本第四紀学会

会長 遠藤 邦彦 殿


2009年度会計監査報告書


2010年8月5日(木)、(株)春恒社 会議室において日本第四紀学会  
2009年度収支決算報告書(2009年8月1日～2010年7月31日)の  
監査を行い、予算の執行、帳簿、証券の整理等、正常適正に処理されて  
いることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2010年8月5日(木)

会計監査 松浦 秀治 

会計監査 水野 清秀 

**資料（４） 2010年度予算案**  
**（2010年8月1日から2011年7月31日まで）**

**収入の部****（単位：円）**

科 目	2009年予算額	2009年決算額	2010年予算案	摘 要
会費収入	12,900,000	12,294,310	12,398,500	
正会員会費収入	12,600,000	12,014,310	12,118,500	9,000円×1,350名×97%+（学生5,000円×50名×90%）+（海外会員120,000円×90%）
賛助会員会費収入	300,000	280,000	280,000	20,000円×11社（14口）
団体会員会費収入	0	0	0	2006年度から一般購読扱
誌代	2,000,000	1,620,848	1,800,000	Back No., 定期雑誌仕入, 予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	800,000	832,072	800,000	
雑収入	700,000	1,182,064	200,000	JST、著作権料収入等
利子収入	10,000	29,800	10,000	
広告料収入	0	0	200,000	2010年度会員名簿広告料
役員選挙積立金取崩収入	0	0	350,000	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	300,000	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	1,000,000	
科研費補助金・助成金収入	0	0	0	
収入合計	16,410,000	15,959,094	17,058,500	
前期繰越金	7,910,134	7,910,134	6,227,415	※10年度前期繰越金は09年度予算より計上
合計	24,320,134	23,869,228	23,285,915	

**支出の部****（単位：円）**

科 目	2009年予算額	2009年決算額	2010年予算案	摘 要
会誌発行費	7,040,000	7,372,790	7,040,000	第四紀研究 49巻4号～50巻3号 計6号
会誌印刷費	4,000,000	4,019,925	3,600,000	
会誌編集費	1,000,000	1,478,078	1,500,000	
会誌編集人件費	1,440,000	1,440,000	1,440,000	編集書記手当
会誌別刷印刷費	600,000	434,787	500,000	
会誌・会報発送費	1,000,000	905,647	700,000	第四紀研究 49巻4号～50巻3号 計6号
会報発行費	910,000	919,656	910,000	第四紀通信 17巻4号～18巻3号 計6号
会報印刷費	700,000	696,360	700,000	第四紀通信印刷費
会報編集費	10,000	9,146	10,000	第四紀通信編集費
会報編集人件費	200,000	214,150	200,000	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2011年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2011年大会用
講演会・シンポジウム費	200,000	286,652	200,000	
予稿集印刷費	500,000	457,168	500,000	2010年大会講演要旨集
学会賞費	200,000	190,065	200,000	副賞(50,000円×2名として)、賞状作成費
講習会費	100,000	20,000	100,000	
通信費	300,000	334,130	300,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
会議費	100,000	53,822	100,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	450,000	639,710	800,000	幹事会・委員会等交通費
印刷費	400,000	322,275	400,000	学会専用封筒、総会資料印刷、コピー代金
業務委託費	2,943,990	2,870,411	2,836,995	
特別刊行物編集費	0	0	0	
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	2,000,000	948,791	800,000	
INQUA対策費	100,000	110,800	400,000	
役員選挙費	0	55,094	700,000	
名簿作成費	0	0	1,500,000	
名簿発送費	0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出	100,000	100,000	0	
役員選挙費積立金繰入支出	350,000	350,000	0	
名簿作成積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
研究委員会助成金支出	250,000	74,212	250,000	50,000円×5委員会で算出
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	30,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金
特別委員会活動費	100,000	0	0	第四紀の定義検討のための特別委員会
雑費	100,000	88,290	100,000	振込手数料等
予備費	200,000	12,300	200,000	
支出合計	18,873,990	17,641,813	19,066,995	
次期繰越金	5,446,144	6,227,415	4,218,920	
合計	24,320,134	23,869,228	23,285,915	

**資料（５） 2009年度業務委託費  
(2009年8月1日～2010年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,795,725</u>	
1. 会員管理費	1,052,100	( 1,503件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	12,000	( 12件× 1,000円)
(賛助会員)	11,000	( 11件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	280,625	( 計 11225件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	8,000	( 計 8回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	432,000	( 120箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u>	(@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u>	※年間
IV. 庶務業務費用	<u>52,000</u>	※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>96,000</u>	※別刷請求手数料他
		※マーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>136,686</u>	
合 計	<u>2,870,411</u>	

**資料（６） 2010年度業務委託費見積  
(2010年8月1日～2011年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,761,900</u>	
1. 会員管理費	1,050,000	( 1,500件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	14,400	( 12件× 1,200円)
(賛助会員)	11,000	( 11件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	212,500	(計 8500件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	6,000	(計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	468,000	( 130箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u>	(@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u>	※年間
IV. 庶務業務費用	<u>50,000</u>	※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>100,000</u>	※別刷請求手数料他
		※マーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>135,095</u>	
合 計	<u>2,836,995</u>	

## ◆ 2009 年度第 7 回幹事会 議事録

日時：2010 年 7 月 24 日（土）13:00～18:00  
 場所：早稲田大学教育学部 16 号館 10 階 1029 社会科会議室  
 出席：遠藤（会長）、小野、竹村（以上、副会長）、百原（幹事長）、三田村、池原、久保、荻谷、長橋、吾妻、中野（事務局）

### 議事

- (1) 大会、総会、評議員会の準備について、メールによる委任状受付、賞状の準備、当日の枠割分担任などについて確認した。
- (2) 評議員会・総会資料について、次年度の活動計画の検討と併せて、内容を検討した。
- (3) 顕彰に関するスケジュールについて検討し、それに伴い、規定類の一部改訂を評議員会に提出することにした。
- (4) 6 月に開催されたシンポジウムに関する特別号の刊行について議論した。
- (5) 来年度の幹事会開催予定およびそれにかかる交通費について検討した。
- (6) 功労賞、名誉会員、学会賞の整理と選考方法について検討し、幹事会内で引き続き検討していくこととした。
- (7) 名誉会員の総会への参加とそれに伴う会則等の改訂について検討した。
- (8) 専門分野および役員選挙方法を検討するための専門委員会の設置について検討し、当面の間、

幹事会で検討を続けていくこととした。  
 (9) 名簿作成のスケジュールを確認した。

## ◆ 2010 年度第 1 回幹事会 議事録

日時：2010 年 8 月 20 日（金）12:10～13:45  
 場所：東京学芸大学 20 周年記念飯島会館 2 階第 4 会議室

出席：遠藤、小野、竹村、百原、荻谷、植木、須貝、高田、久保、奥村（研連）、中野（事務局）、吾妻

- 議事：
- 1) 評議員会。総会などの進行および役割分担について確認した。
  - 2) 6 月シンポジウム冊子企画書について検討した。
  - 3) 顕彰関係のスケジュールについて検討し、各賞の推薦締切を 2011 年 1 月末日とすることとした。
  - 4) 2011 年 3 月に開催を予定している講習会について検討した。
  - 5) 2012 年に島原市で開催される第 5 回世界ジオパーク会議の組織委員会について、学会から委員として森脇 広会員を推薦することが報告された。
  - 6) 幹事会と大会運営との関係について検討した。
  - 7) 沙漠学会主催のシンポジウム（10/16：奈良女子大学）に後援することを確認した。
  - 8) 次号第四紀通信の入稿締切について確認した。
  - 9) 次回幹事会を 2010 年 11 月 8 日（日）午後日本大学文理学部で開催することとした。

以上

## ◆ 自然史に関する教育・アウトリーチ活動についての情報交換の場 “ポスターサロン” の開催報告

あっ、あつい！今すぐにも熱中症で倒れそうだ。ポスターボードが風の流れを遮断する。会場に充満するむっとする熱気。吹き出す汗、流れる汗が目にしみる。これは、はたして冷房がないからか、それとも参加者の熱意によるものか？ ここは日本第四紀学会のポスターサロンの会場である。

今回のシンポジウムのテーマが自然史教育で一般に公開されることを鑑みて、自然史に関する教育・アウトリーチ活動についての情報交換の場をシンポジウムにあわせて設定した。研究発表のポスターよりも気軽に情報交換できるよう“ポスターサロン”と銘打ち、地産地消のために山梨県小菅村産の地ビールも販売することにした。当初は自然史に関する活動を行っている市民を対象に目指したが、日本第四紀学会と市民との接点が少なくあえなく挫折。結局は、市民向けの自然史教育を行っている機関・団体が主な対象となった。また、日本第四紀学会の扱う研究内容から、地学の中の気象や天文の分野には接点がなく、今回のポスターサロンの内容が地形・地質・岩石に偏っていたのも反省すべき点で

植木岳雪（産総研・地質情報研究部門）  
 ある。

ポスターサロンにははたしてどれくらいの参加があるか、日本第四紀学会幹事会の誰もが予想できなかったのも、皆が知り合いに声をかけたところ、なんと 147 件ものエントリーになった。7 月になって急遽会場の変更が余儀なくされ、前述のように冷房がない食堂を会場にせざるをえなかった。ポスターボードも全く足りず、さまざまところからかき集めることになった。まったく嬉しい悲鳴である。

ポスターは、各地のジオパークが 30 件、全国規模あるいは一般的な活動が 30 件、北海道から沖縄までの地域的な活動が 87 件であった。多くのポスターは日本第四紀学会の非会員によるものである。ジオパークについては、今後ジオパークを目指す地域のエントリーが多くあり、日本第四紀学会としてそれらの地域へのさまざまな支援や協力の必要性を感じた。“ナダレンジャー”のパフォーマンス、小型水路の堆積実験、プレート運動の球面投影、伊豆大島の詳細模型などの実演コーナーは常に盛況であった。他学会による教育・



アウトリーチ活動の紹介は、日本第四紀学会の今後の活動の参考になるものであった。地域的な活動は、もう百花繚乱！緑提灯がぶらさがり、防災ラジオドラマが流され、露頭からはぎ取られた地層があり、石の楽器が奏でられている。ブルーシートや和紙でできたポスターもあった。全国で行われている多様な活動が紹介され、各所で活発な情報交換が行われていた。少数ではあったが、大学生、大学院生、市民の発表があったのは特筆すべきである。茨城県の竹園高校によって自作の環境カルタの紹介があり、大会実行委員長の小泉先生から発表した高校生に表彰状が授与された。以下に、ジオパーク・研究所・他学会のアウトリーチの活動、市民および大学院生の活動からみたポスターサロンの率直な感想をのせるので、ポスターサロンの様子を感じ取ってほしい。

学会でしかできない、学会がやるべき教育・アウトリーチ活動は何か？今回のポスターサロンのように、生涯教育としての教育・アウトリーチ活動の情報交換の機会・場を設定することは、有力な回答の一つであると思う。今回は日本第四紀学会に関連する分野で市民向けの教育・普及活動を行っている機関・団体の交流が中心となったが、このようなポスターサロンがいずれは市民に直接訴えるものとなることを期待したい。最後に、ポスターサロンに参加したすべての機関・団体・個人の方に、深く感謝申し上げます。

#### ●日本第四紀学会 2010 大会ポスターサロンに参加して

熊谷 誠（遠軽町総務部ジオパーク推進課）

2010年大会シンポジウムのポスターサロンに参加させていただいた。ジオパークに関係する各地域や大学、研究機関、民間団体など様々な立場の方々からお話を伺うことができた。ジオパークに関係する地域には、大きく立ち上げ段階、申請・審査段階（認定前）維持・運営段階（認定後）の3つの段階が存在するが、主体となる組織と協力組織との連携体制や、これまでの調査・研究、整備状況等によって、地域ごとに複雑な様相が生じてきているように思われる。シンポジウムにおいて町田洋先生が指摘されたように、ジオパークを目指す地域にはすでに観光地化されジオパークという活動が認知されにくい地域と、過疎化等による新たな地域おこしの必要性から積極的に活動に取り組む地域とがある。前者は地域にとってメリットが見えにくいと、立ち上げから申請までがスムーズに移行しない場合があり、後者は大学・研究機関との連携不足から科学的な基礎情報に欠け、要

件を満たさない場合がある。地域ごとのケースに応じた対応策を講じなければならないが、地域や組織が独自に進行するのではなく、今後は認定にまで至った地域をモデルケースとし、それぞれの段階において必要とされるヒト・コト・モノの把握、それらが整うまでの目安となる時間などを提示できるようにしていく必要があると考えられる。今回のポスターサロンは、そのような横の繋がりを構築し、情報を共有していくきっかけとなる大変有意義なものだった。

#### ●ポスターサロンに参加して

佐藤由美子（産総研・地質調査情報センター）

学会というものに初参加の非会員である私は、エネルギーあふれる地学分野の潜在的な大きな力を参加するまで知らなかった。空調のなかったポスターサロン会場では、様々な団体が放つ意欲の熱気で体感温度は急上昇。遠路から参加した団体も多々あり、規模の大小にかかわらず、それぞれ工夫をこらした興味深い活動発表が並んでいた。その1つに子どものための「化石塾」があることには驚いた。最近はやい事の科学塾が盛況だが、これはニッチな地学教育における新しい形だろう。もっと外に情報を発信・アピールすれば、地学を採用する高校がまた増えるのではないだろうか。貴重な経験をさせていただいたことに感謝したい。

#### ●ポスターサロンの感想

対馬良一（財団法人トトロのふるさと財団）

「自然史教育」という括りで、さまざまな分野からの取り組みが報告されたポスターサロン会場は文字通り熱気に包まれていました。当財団を含めたトラスト団体が自然史教育を実践する団体ということで、他の関連する団体、研究機関や行政機関と発表の場を共有できたことは大変有意義だったと思います。また、池田 宏先生の流路実験など一般の方が興味を惹く実験で専門分野の研究を紹介していたのが印象的でした。まさに多元性と学際性を特徴とする日本第四紀学会ならではの光景が見られました。自然史教育という視点で財団の環境教育を見直すことができたこと、近隣施設や団体の方と直接情報交換できたことは大いなる収穫でした。望むらくは個別の情報交換だけではなく、それをオープンな場で共有する時間が持てたら良かった。ビール片手に（地ビール美味でした）。

#### ●陸と空・星・海との間

市川 洋（日本海洋学会教育問題研究会）

プログラムを見て、ポスターサロンでの発表件数の予想外の多さと、その中に占める陸域関係の出展の多さに驚いた。また、講演が陸域関係のみであることに戸惑いを覚えた。我々の展示では、これまでの海洋の教育と知識の普及に関わる活動内容をまとめてポスターで示した。しかし、この展示に興味を示した人の数は、10名未満だった。主に陸域の自然に関わる多種多様な教育・研究活動をしている参加者には、海洋の教育・普及活動は興味の対象外であったらしい。「自然史」が人間を取り巻く自然を総合的に理解するための学問であるとするのならば、その教育・普及活動においては、陸（地形・地質・鉱物・火山・地震他）に留まることなく、空（気象・気候）、星（天文・宇宙）、海（海中の生物・物質分布とその変動）との関わりを強化する必要がある。今後、機会があれば、このことについて皆さんと意見交換をしたいという思いが募る催しであった。

#### ●ポスターサロンに参加しての感想

千葉 崇（東京大学大学院・新領域創成科学研究科）

今回ポスターサロンにおいて、サイエンスカフェについての発表をさせていただきました。ポスターサロンは、全国から沢山の自然史教育・研究普及（いわゆるアウトリーチ活動）に関する発表が集まった、画期的な試みだったと思います。コーヒーやビールを片手に語り合える、正にサイエンスカフェのような雰囲気も良く、ざっくばらんに議論をさせていただきました。発表中は、若手発表者が少なかったことと発表分野の偏りに少々危機感を感じました。もっと若手をアウトリーチ及びサイエンスコミュニケーション活動に巻き込んでいければと思います。そして本発表を通して、どんな場面でもアウトリーチ活動はトップダウンに行われてはならず、またそれにより知識、価値観、思い入れなどを聞き手に押し付けてはいけなさと改めて感じました。また機会があれば参加させて頂きたいと思います。最後に、発表及びアンケートの回収に協力していただいた産総研の植木岳雪博士と東京学芸大の皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。

#### ◆日本第四紀学会 2010 年総会議事録

日時：2010年8月21日（土）10:45～11:45

場所：東京学芸大学芸術館ホール

議長：山崎晴雄

出席会員数：86名、委任状187通

久保行事幹事の司会により、遠藤邦彦会長、小泉武栄大会実行委員長からあいさつがあった。山

ます。

#### ●防災人形劇の公演

植木岳雪（産総研・地質情報研究部門）

幼稚園や小学校の児童は、知識・認知・行動のレベルが中学校以上の生徒および市民と比較して低いことから、独自の自然史教育の方法が求められる。そこで、児童向けの防災教育の実例として、シンポジウムの午後の部の最初に2件の人形劇の公演を行った。

最初は、聖徳大学短期大学部の幸田眞希さん。イギリスの童話「3匹の子ぶた」を脚色した人形劇である。木造家屋の筋交いが地震動に対して重要であることを、舞台枠の中で子ぶたとオオカミの2匹の人形がコミカルに演じる。人形劇の前後で、幸田さんの声色が大人から子どもにがらっと変化する。人形劇に没入するあまり、幸田さんはしばらく大人の頭に戻れないそうである。今回は10分間の公演であったが、あと5分あるとさらにももしろい話になるとのことであった（詳細は、<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/yamaoka/outreach/puppet-play/kobuta.html>を参照）。

次は、静岡県在住の一人人形劇団の“わにこ”さん。今回は新作の「こぶたちんと変身オオカミ」の公演で、これも「3匹の子ぶた」を脚色した人形劇である。子ぶたとオオカミの2匹の人形はわにこさんのおなかの上。エプロンがひらひらして、舞台が変わる。子ぶたが建てた木造家屋を地震オオカミが倒していく、しかしレンガ造りの3階建ての家は地震でも津波でも倒れない。あっという間の10分間であった。わにこさんには、ポスターサロンの会場で防災紙芝居「さとちゃんの稲むらの火」、「あか防災ずきんちゃん」の公演もしていただいた（詳細は <http://www.waniko.net/index.html> を参照）。

幸田さん、わにこさんによると、児童は人形劇にのめりこみ、子ぶたに声を上げて応援することもあるそうで、市民に対しての公演よりずっとやりやすいとのことである。児童を対象とした自然史教育では、人形劇は有力な方法と思われる。公演をみた皆さんの感想はどうであらうか？

崎晴雄会員を議長に選出し、定足数確認後、配布資料に基づき下記の報告および審議を行った。

#### I. 報告事項

##### 1. 2009年度事業報告（百原幹事長）

各事業の報告（本号「第1回評議員会議事録」に掲載）ならびに、2009年度に逝去された会員に対して黙祷をささげた。

##### 2. 2009年度決算報告・会計監査報告（吾妻庶務

幹事)

資料(1)、(2)、(5)に基づき2009年度会計決算報告が説明され、続いて松浦会計監査より資料(3)に基づき会計監査報告が行われた。

### 3. 2009年度委員会活動報告等(百原幹事長)

2009年度研究委員会活動、学会賞・学術賞ならびに論文賞・奨励賞の選考結果、INQUA招致準備委員会の活動報告、第四紀の新しい定義に関する特別委員会、第21期日本学術会議INQUA分科会の活動報告について説明が行われた。

## II. 審議事項

### 1. 2010年度事業計画(百原幹事長)

学会活動方針について、審議が行われ、原案の

まま承認された。

### 2. 2010年度予算(吾妻庶務幹事)

資料(4)、(6)に基づき、2010年度予算案について審議が行われ、原案のまま承認された。また、支出を節約する検討を幹事会で行っていくこととした。

### 3. 会則改訂(百原幹事長)

資料に基づき、名誉会員が総会に参加し発言することができることを示す条文を追加することが提案され、原案のまま承認された。

4. 第19回INQUA大会日本招致委員会の斎藤文紀委員長より招致活動の状況が説明され、開催候補地を名古屋として準備を進めることが承認された。

## ◆ 2010年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者講演会(第1回)報告

### ● 首都大学東京大学院都市環境科学研究科地理環境学域 博士前期課程 林崎 涼

8月21日(土)、東京学芸大学芸術館ホールにて、日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者の講演会が行われた。講演者は学会賞受賞者の多田隆治先生(東京大学教授)と学術賞受賞者の鈴木毅彦先生(首都大学教授)のお二方であった。

日本第四紀学会学会賞受賞者の一人である多田隆治先生は「日本海堆積物を用いた第四紀東アジアモンスーンに関する研究」というタイトルで講演された。講演では、多田先生の現在のアジアモンスーンに関する一連の研究に至る研究過程と最新の研究内容について話して頂いた。

講演の始めに1989年のODPの日本海航海時に、当初は中新世の珪質頁岩の女川層について研究しようと考えていたが、コアの回収率がほとんどなく、日本海における第四紀堆積物の明暗互層の研究について取り組んだと話された。その後、明暗互層について有機炭素量、海水の養分や塩分濃度の関係性を明らかにしただけでなく、さらに対馬海流との関係性や揚子江との関係性などの研究成果や、堆積物中の風成塵の起源などの多数の研究成果などからアジアモンスーンの変動について話して頂いた。

私は多田先生が1989年のODPの航海前から日本海の明暗互層に取り組もうとしていたと思い込んでいたが、航海中に新たな課題を見出し、取り組んでいったとのことであった。また、アジアモンスーンの変動が日本海堆積物に与える多数の影響が分かるとともに、一つの課題に多面的なアプローチで考察を行っていることに感銘を受けた。私は海岸部における砂の運搬過程についてOSLを応用して解明しようとしており、海岸部での砂の運搬過程が、様々な自然の要素や人間の影響を受

けていることを実感している。私も一つの課題に対して、一つの手法のみで考察を行うのではなく、先生のように臨機応変に、広い視野をもって研究に取り組んでいきたいと思った。また、今後もこのような機会があればぜひお話を伺いたいと思う。

### ● 東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 自然環境変動学分野 修士課程 門谷弘基

学術賞受賞者として、鈴木毅彦先生(首都大学教授)が「テフラ対比に基づく中部～東北地方の火山噴火史および古地理復元に関する研究」という題目で講演された。

鈴木先生は、地形形成史と火山噴火史とテフラ(ツールとしてのテフラ)、テフラ自体を調べるようになったこと、関東平野とテフラについて、というトピックを、現在から学部時代にまでさかのぼったご自身の研究経歴になぞらえて講演された。

鈴木先生のテフラ研究の始まりは、テフラをツールとすることで地形形成史と火山噴火史を明らかにしようとしてすることであった。鈴木先生は学生時代、当時関東平野の中でも研究事例の少なかった、北関東をフィールドに研究を行い、大町APmテフラの層位と噴出年代、赤城火山の噴火史等を明らかにされた。北関東をフィールドに選定されたことが、故・貝塚爽平先生(東京都立大学名誉教授)の勧めであったこともお話しされていた。その後、さらにフィールドを南関東に広げられ、北関東とのテフラの対比を行い、北関東だけの調査では認定出来なかった層が箱根TAu11テフラであることを解明された。これまで海洋酸素同位体ステージ6(MIS6)からMIS5.5に至る海面変化の規模・推移等について、地形・地質学的な考察は限られていたが、この研究成果によって新たな火山灰編年学的知見を加

えられた。さらに研究フィールドは関東だけにとどまらず、中部地方や東北地方においても研究されており、北日本の広域テフラが偏西風によって規制されるのではなく、変化しやすい地上風が一定期間運搬するという運搬メカニズムについてもお話された。

周知の通り、テフラは火山イベントが起こった際、短期間にそして広域に堆積する。そのため堆積物の層準に年代を入れるためのツールとして非常に重要である。私は現在、中央アジアのカザフスタンに位置するバルハシ湖をフィールドに、堆積物を用いた古環境

復元を目指しているが、堆積物の層準に時間軸を挿入するのに苦慮している。一方、日本のテフラが存在するフィールドにおいては、テフラ研究の成果によって時間軸を決定することができる。これは鈴木先生をはじめ、これまでテフラを研究されてきた方々の大きな功績であるとあらためて感じた。そのようなテフラ研究の第一線で活躍されている鈴木先生の講演を聴講することができ、非常に感激した。鈴木先生に敬意を表するとともに、今後増々のご活躍を願っております。

## ◆日本第四紀学会 2010 年大会シンポジウム報告

大会実行委員会事務局長 財団法人自然保護助成基金 目代邦康

「自然史の教育と研究をすすめるためにさまざまな分野からの取り組み」をテーマに、2010年大会のシンポジウムが行われました。これまで、日本第四紀学会大会のシンポジウムで、教育やアウトリーチをメインテーマにしたものは行われていません。しかし、学術研究の社会への情報発信が必要とされる現在、第四紀学の幅広く学際的な成果を教育の場に活かし、より良い情報発信の形を探ろうとシンポジウムを企画しました。様々な場面で情報発信されている方々の方法論を学ぶということで、その実践をされている10名の方に講演をお願いしました。さらに防災にかかわる人形劇の実演、そしてポスターセッションという構成にしました。

世話人の一人である私の趣旨説明に続き、植木岳雪さん（産総研）から、「自然史教育の方法と対象」と題して、なぜ情報発信が必要なのか、学界と社会をどのように繋いでいくべきかということが論じられました。次に、市民向けの講座を多数実施されている小泉武栄さん（東京学芸大）は、カタクリやシデコブシを素材にしてどのように自然史の面白さを伝えているのかを報告されました。分野を横断する視点と、ストーリーが重要であることを述べられました。佐藤雅彦さん（利尻町立博）は、「さいはての島における自然史ネットワーク」と題して、利尻町立博物館での活動を報告されました。博物館の自然科学分野すべてを一人で網羅されている佐藤さんは、利尻という場所でどのように研究のネットワークを作っていくのかということについて話されました。ネットワークをつくるだけでなく、そこに流れる「血」が重要であるという話が印象的でした。町田洋さん（前日本第四紀学会会長）は、日本ジオパーク委員会副委員長としての経験に基づいて、ジオパーク

の現状とこれからについて報告されました。ジオパークでは、全体をつなぐストーリーが重要であることを、そして、保全の取り組みが必要であることを述べられました。ジオパークという場合は第四紀学の成果の発信に、適している場であると感じました。浅野眞希さん（筑波大）は、日本土壌肥料学会の土壌教育の取り組みを報告されました。日本土壌肥料学会では、現在学校教育において土壌教育が十分行われていない現状を鑑み、一般向けのテキストをつくりそれを改良していくなど、積極的に情報発信に取り組んでいます。学会としての取り組みとして、大変参考となる内容でした。ここで、午前の部が終了しました。

午後は、防災人形劇から始まりました。それに引き続き、児島正さん（損保ジャパン）と濱野航平さん（工学院大）が「損保ジャパンの防災CSR戦略と町火消し試（私）論」と題して、民間企業の視点での防災教育について報告されました。角田清美さん（都立北多摩高校）は「郷土の自然と歴史—普及と教材化—」と題して、これまでの高校教員生活の中で、どのように地域の素材を教材化してきたのかを話されました。高校の授業さながらのOHPを持ち込んだの発表でした。池田宏さん（深田地質研）は、これまでの自身の研究経歴を振り返り、大型水路を使っの河川地形の研究から、現在の小型水路を使っの多くの人に伝える活動に至った経緯を話されました。池田さんも普段の市民向け講座と同じ、イーゼルにポスターをたてかけての講演スタイルでした。さらにポスターサロンでは、小型水路を用いた実験を披露され、多くの方がその実際を体感されていました。牧林功さん（埼玉昆虫談話会）は、「分布様式としての関越要素の存在について」と題して、昆虫の分布と自然史について報告されました。広

い視点での昆虫に注目した自然史研究の成果でした。最後に、小菅将夫さん（みどり市立岩宿博物館）は、「石器作りの体験学習と考古学」と題して、考古学の博物館活動について報告されました。これまでの豊富な経験に基づいて体験学習の重要性を話されました。

総合討論の時間がほとんどなくなってしまったため、数名の方に自然史教育を進展させていくために日本第四紀学会に望むことをコメントしていただきました。日本第四紀学会の持つ学際性を生かした活動が期待されていること、また、地学現象のローカルな側面と一般的な側面をどのように扱うかといった意見も出されました。今後も機会を作って議論をすすめていく必要あると感じました。

150名ほどの参加者で、会場の席はほぼ埋まりました。正確に数えていませんが、会場での発言やアンケートの結果を見ると、過去に行われた日本第四紀学会大会シンポジウム

としては、非会員の参加数は最も多い規模であったのではないかと思います。これは自然史教育というテーマが、日本第四紀学会会員のみならず多くの人たちの関心事であることを示していると思います。

当日の講演の内容についてまとめたものは、「第四紀研究」特集号で後ほどお伝えできると思います。シンポジウム世話人一同は、日本第四紀学会の社会への情報発信機能のますますの多様化、高度化が進むことを願ってやみません。このシンポジウムを機に、今後の更なる議論をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、当日講演、実演していただきました演者の皆様、ポスターサロンにご出展いただきました皆様、会場にお越しいただいた皆様のおかげをもちまして、事務局の不手際があったにも関わらず、シンポジウムは成功裏に終了いたしました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

### ◆神奈川県立生命の星・地球博物館特別展

#### 『日本列島 20 億年—その生い立ちをさぐる』

神奈川県立生命の星・地球博物館では標記の特別展を開催しています。日本最古の岩石をはじめ日本列島を構成する各地質体の代表的な岩石標本及び化石標本から日本列島の生い立ちをさぐる展示の他に、付加体、オフィオライト、岩石サイクルなどキーワードの解説展示もあります。第四紀関係では、上総層群大田代層のタービダイト剥ぎ取り標本(4.5m × 3m)などを展示しています。

場所：神奈川県小田原市入生田 499、箱根登山鉄道（小田急線乗り入れ）入生田駅下車徒歩 3 分、車は国道 1 号線「地球博物館前」交差点（歩道橋に表示あり）入  
電話：0465-21-1515 URL：http://nh.kanagawa-museum.jp  
開催期間：2010 年 7 月 17 日（日）～ 11 月 7 日（日）

### ◆東海地震防災セミナー 2010[第 27 回]のお知らせ

昭和 59 年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日時：平成 22 年 11 月 11 日（木）13:30～16:00

会場：静岡商工会議所静岡事務所 5 階ホール（JR 静岡駅北口西側）

テーマ：東海地震への新たな対策

座長：静岡大学理学部地球科学科 静岡大学防災総合センター 教授 里村幹夫

1. プレート沈み込み帯の巨大地震に関する新たな知見と残された謎  
名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター 教授 鷺谷 威

2. 自主防災組織のための新たな人材養成講座開発の試み  
静岡大学工学部システム工学科 静岡大学防災総合センター 准教授 前田恭伸

主催：東海地震防災研究会

連絡先：〒 422-8035 静岡市駿河区宮竹 1-9-24 土研究事務所 土 隆一

Tel：054-238-3240 Fax：054-238-3241

## ◆日本第四紀学会 2010 年大会巡検報告

(辻村千尋 ((財) 日本自然保護協会、大会事務局)

日本第四紀学会 2010 年大会の巡検が 8 月 23 日に、「里山景観の違いを探る一地生態学の視点から一」と題して行われました。案内者は科学技術振興機構の増沢有葉会員、東京学芸大学小泉武栄会員、日本自然保護協会の辻村千尋の計 3 名で、一般参加者は 15 名、ほかに学芸大関係者 4 名でした。

巡検ではまず、秋留台地の湧水と土地利用に焦点をあてておこなわれました。台地の最上面(秋留原面)では、湧水も無く土地が乾いており、畑地利用がおこなわれていますが、一段下がると、礫層の下から湧水が湧いており、武蔵の国の二ノ宮がおかれ、古くは縄文時代から人の利用が見られ、水田として使われていた事を現地で観察しました。古東京湾の堆積物は、粘土質が高く不透水層になって、そこから湧き水が湧出している様子も観察できました。その後、秋川まで段丘面をおり、霞提を観察し、加住丘陵のカタクリ群生地を観察しました。こちらの丘陵は、非常に乾いており、水田などの土地利用はなく、一方で、この後観察した五日市丘陵は、湧水が豊富で、水田利用が見られることの違いを、現地で議論しました。基盤の地質条件により、湧水量に違いが生じ、結果、里山景観の違いが生じていることを、地生態学的に明らかにした案



段丘の地形発達を説明する小泉会員と増沢会員

内者の増沢さんの論文を基本に、現地では非常に活発な討論が出来たのではと感じました。また、参加していただいた角田会員や久保会員を始め、現地で疑問を提示していただき、参加者全員で回答を考察するということができ、非常に有意義であったと思います。

ここまで巡検は非常に順調に進行したとご報告したいところですが、案内者の一人である筆者が、スズメバチに刺されるアクシデントがおこり、当日の進行で、参加した皆様には大変ご迷惑をおかけした事をお詫びいたします。今回の件では、熱中症対策等のために緊急搬送用に車両を待機させており、緊急搬送用の病院などの位置確認をしていたため、ハチによるアレルギー症状が発症した段階で、即座に対応できたため大事には至りませんでした。最後に課題を整理しておきたいと思います。まず、実際の実施に際して直前の現地下見で危険箇所の把握が必要だと思います。今回は、道のすぐ脇にある木の根に、新たに造巣しはじめていたスズメバチ類の存在に気づかず、20 人前後の人が通過したことによって発生しています。最後尾にいた案内者の一人が犠牲になりましたが、その場にいた誰もが襲われる危険があったと思います。できるだけ直前には、現地の安全確認が必要であると感じました。また、ハチによるアレルギー症状は、一般的に二度目が危険とされていますが、私の場合は一度目でしたが全身に蕁麻疹が発症し、専門医によると重い症状だったようです。これは、その他のアレルギーをもっている場合、こうした事が起きるようで、私の場合はアレルギー喘息を持っていました。こうした観点から、参加者にはあらかじめ、ハチに刺された経験の有無、食物アレルギーなど、その他のアレルギーをもっているかの確認をおこなっておいた方が、より迅速に対処できると思われます。今後の巡検では是非こうした点も考慮して頂ければ、幸いです。

## ◆2010 年日本第四紀学会巡検参加報告

(専修大学大学院文学研究科地理学専攻 続木敏之)

日本第四紀学会 2010 年大会巡検は「里山景観の違いを探る一地生態学の視点から一」というテーマで、8 月 23 日に東京都あきる野市で開催された。案内者は小泉武栄(東京学芸大学)、増沢有葉(科学技術振興機構)、辻村千尋(日本自然保護協会)の 3 氏。当日は気温が優に 35℃を超えたが、約 20 名の参加者は暑さに負けず 1 日巡検を歩き通した。以下、時間順に見聞を記したい。

(1) JR 五日市線東秋留駅を午前 9 時に出発し、駅の北西に広がる野菜畑へ移動した。ここは秋川の河岸段丘面で最高位にあたる秋留原面(秋留台地)に位置する。隊はそのまま東へ移動し、二宮神社に至った。その境内は秋留原面の東端にあり、敷地の縁には礫層の露出する段丘崖がみられた。礫は石段や石碑にも利用されているといい、一宮である大國魂神社の鳥居がなぜ北を向いているのかな



ど、人文科学的な議論も交わされた。(2) 続けて、二宮神社の南東にある湧水池へ移動した。この場所は秋留原面から1段下がった野辺面にある。ここに湧水があるのは、野辺面の地下水位が高いことと関連するらしい。池は涼しげに澄んでおり、多様な魚が生息していた。(3) 湧水池を後に隊は南へと移動し、同じ野辺面上にある前田耕地遺跡に至った。同遺跡は現在、住宅地や公園となっているが、縄文時代草創期から古代に至る集落跡が出土し、クマの骨やサケの顎の骨、石槍が発見されたという。その後、野辺面上を西へ移り、東京の名湧水57選に名を連ねる八雲神社にも立ち寄った。この天然水も野辺面の地下水の恩恵によるものであろう。(4) 八雲神社を発った我々は、野辺面、その下位の小川面と、段丘地形を感じられる緩い下り坂を通りつつ秋川左岸に至った。氾濫原の一角は湧水が豊富なため水田が広がっているが、1940年代に土地改良が行われるまでは空地が多かったという。そこでは霞堤による治水対策も観察した。東秋留橋で対岸に渡り、午前の部は終了。昼食休憩となった。(5) 午後は東秋留橋から東へ移動し、秋川右岸にある加住丘陵切欠地区へ向かった。加住礫層からなるこの地は、左岸とは対照的に湧水が少なく、栗畑が広がる里山景観が展開していた。切欠地区では崩壊堆積物上にカタクリがよくみられるが、最近では雑木林を切りすぎたために野草が増え、カタクリの生育にとって好ましくない環境に変化しているとの解説があった。路傍では徳川家の家紋であるアオイも発見でき、植物の豊かさを参加者一同で実感した。(6) 切欠地区を離れた隊は東秋留駅へ戻り、武蔵増戸駅へ移動した後、駅の西にある横沢地区をめざした。南北に横たわる横沢入は細く深い谷で、尾根と谷底の起伏が最大90mもあるが、谷底には棚田が一面に広がり、昔懐かしい里山の風景をみせていた。筆者の



横沢入の里山景観

住む多摩丘陵では斜面に桑畑が、尾根に畑がみられることも多いが、横沢入では斜面に植林が施され、尾根も狭くて利用価値が低いように見うけられた。ちなみに、1980年代、大手鉄道会社が沢沿いの土地を購入し、谷を尾根の切土で埋めてニュータウンを開発する計画があったが、湧水が多いために計画は中断されたという。現在、サンショウウオやイモリも棲息しており、小学校の稲作体験も行われているらしい。(8) 午後4時、横沢地区での解説をもって行程は終了となった。その後、多摩地方の地域研究に長年あたられ、本大会のシンポジウムでも発表された角田清美氏によるオプション巡検が武蔵五日市駅周辺でさらに2時間ほど開催されたことを付記しておきたい。

巡検のテーマどおり、切欠地区と横沢地区で異なる里山景観を目のあたりにした。それぞれ、地形・地質や植生、微気象に特徴があり、その相違を肌身をもって会得できた1日であった。また多くの参加者と出会え、貴重な話を伺えたことも大きな収穫である。末筆ながら、案内者および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

## ◆シンポジウム「日本列島における酸素同位体ステージ3の古環境と現代人的行動の起源」報告

2010年6月5日(土)・6日(日)、長野県御代田町の浅間縄文ミュージアムにおいて、本シンポジウムが開催された。主催は、日本第四紀学会研究委員会「東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学」および浅間縄文ミュージアム、八ヶ岳旧石器研究グループの三者である。

5日には、当初に、国立科学博物館の海部陽介さんの講演「人類学からみた日本列島への人の移住史：旧石器時代から縄文・弥生時

代まで」があり、研究者のみならず一般参加も含めて200名の参加があり、盛況だった。この発表では、新たな分析に基づいた港川人の復顔のイラストが初めて披露され、これまでの日本的な復顔と異なった異貌に会場から驚きの声が漏れた。これに続き、「OIS3研究委員会の3年間」の報告が小野 昭さんよりあり、堤 隆の司会で以下の研究発表がなされた。公文富士夫「日本列島中央部におけるMIS3以降の気候編年」、岩瀬 彬「日本

列島における陸生大型哺乳動物の絶滅年代」、工藤雄一郎「後期旧石器時代前半期の年代論—IntCal09 と CalPal-2007Hulu—」。発表では、古気候編年、大型哺乳動物の絶滅年代、較正年代論など今日的な問題が浮かび上がった。当日の夕方には、会場に隣接するメルシャン軽井沢美術館のレストランでワインパーティーがなされ、浅間高原の夜が更けた。

6日には、OIS3 研究委の諏訪順さんの司会で以下の発表がなされた。大竹憲昭「日本列島における3万年前をさかのぼる石器群—竹佐中原から貫ノ木・日向林Bまで」、中村由克「旧石器時代の石斧の石材選択—とくに『蛇紋岩』とされた石材の再検討—」、比田井民子「局部磨製石斧をもつ石器群の石器組成」、山岡拓也「“台形様石器”の用途」、島田和高「環状のムラにおける遺跡連関と移動の軌跡」、佐藤宏之「日本列島における後期旧石器時代の陥し穴猟—OIS3 後半の自然環境と生業・居住を考える—」、加藤博文「OIS3 段階の北ユーラシア」。また紙上発表として、小田静夫「日本列島における後期旧石器時代の磨製石斧」がなされた。日本列島において、後期旧石器時代をさかのぼる石器群がほんとうに存在するのか定かではないが、長野県飯田市竹佐中原遺跡はその可能性のある数少ない石器群として、発表が注目を浴びた。また、OIS3 段階の後期旧石器時代前半期石器群の特徴として、局部磨製石斧・台形様石器・環状

のムラ・陥し穴などがみられるが、各報告ではその諸要素についての詳細な検討がなされた。あわせて、同段階の北ユーラシアにも話が及んだ。最後に、約1時間のパネル・ディスカッションが「OIS3の日本列島における現代人的行動の初源を探る」と題してなされ、局部磨製石斧・台形様石器・環状のムラ・陥し穴などの諸要素を含む現代人的行動とは何かが炙り出された。

なお、当日、会場となった浅間縄文ミュージアムでは企画展「骨は語る」と題して、オオツノジカやナウマンゾウなどの標本、ネアンデルタールや港川人などの複製が展示され、シンポジウムとあいまって、当該期資料の見学が多くの参加者によってなされた。



シンポジウムの様子

## ◆「日本第四紀学会賞」と「日本第四紀学会学術賞」の候補者推薦の募集について

2011年の「日本第四紀学会賞」（以下「学会賞」）と「日本第四紀学会学術賞」（以下「学術賞」）の受賞候補者の受付を開始いたします。両賞は、学会賞受賞候補者選考委員会が、推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、2011年5月に開催予定の評議員会において受賞者が決定され、2011年総会で表彰される予定です。

「学会賞」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

「学術賞」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著者（研究グループ等を含む）によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

つきましては、上記「2010年度第1回評議員会議事録（5. 顕彰関係の規定および内規の一部改正）」を含め「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規」をご参照の上、「学会賞」及び「学術賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「学会賞」の場合には候補者名及び具体的な業績や活動内容を示した受賞件名と推薦理由を、「学術賞」の場合には候補者名及び受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名と推薦理由を記入する。

2. 推薦書類の提出先：

〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階  
日本第四紀学会 学会賞受賞候補者選考委員会 宛

3. 推薦書類の受理期限 2011年1月31日（必着）



### ◆中野尊正先生を悼む

東京都立大学名誉教授、日本第四紀学会元会員中野尊正先生は本年6月24日に90歳でお亡くなりになりました。まことに痛恨の極みであります。先生は本学会創立者のおひとり地理学分野（とくに地形学）の専門家として、創立直後の1956年から3期9年にわたり本学会の会計幹事および行事幹事を務められ、本学会の発展の基礎を築かれました。先生は1942年東京帝国大学地理学科をご卒業後、地理調査所技官に任官され、その後1962年に東京都立大学の教授に迎えられ、1984年定年退職されました。この間、第四紀学の諸分野のうち地形、とくに平野の地形学を発展させ、さらに災害・土地保全研究をなさり、多くの人材を育て、また数多くの業績を出版されました。

それらのうち主な単行本を例示すると次のようです。○地形学関連：「地形調査法」（共著、1951 古今書院）、「日本の自然」（共著、1952 岩波新書）、「日本の平野」（1956 古今書院）、「地形の教室」（新版、共著 1964 岩波書店）、「日本の地形」（1967 築地書館）、「地図との対話」（1978 講談社現代新書）、「地図の教室」（共著、1965 古今書院）、○地誌関連：「世界地誌ゼミナール、アングロアメリカ」（編著、1971 大明堂）、○都市生態学（応用地理学）関連：「都市生態学」（共著、1974 共立出版）、「日本の0メートル地帯」（1963 東大新書）、「地域の計量と評価」（編訳、1973 鹿島出版会）、「巨大地震と大東京圏」（共編、1990 日本評論社）など。どれも現在に通じる研究分野の先駆開拓者的意義をもつものです。このように先生は戦後の研究をリードされましたが、開拓者にありがちで孤高の道を歩まれたためか、晩年には学会との距離をやや遠くにおかれた感があります。

先生の研究教育活動が本学会の基礎造りと発展に大きな影響を与えたことを、われわれは忘れることができません。ここに謹んで先生のご冥福とご家族皆様のご多幸を祈ります。

（前会長）町田 洋

### ◆大阪市立大学大学院理学研究科・理学部地球学教室教員公募

1. 募集人員：准教授または講師3名（募集分野各1名）
  2. 募集分野：つぎの3つの分野  
 (1)：地球物質進化学講座、(2)：環境地球学講座、(3)：環境地球学講座
  3. 応募資格：博士の学位を有すること。
  4. 応募書類（省略）
  5. 書類の送付及び問い合わせ先：  
 〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138  
 大阪市立大学大学院理学研究科・理学部 地球学教室 教室主任 三田村宗樹  
 電話：06-6605-2592 E-mail：mitamura(at)sci.osaka-cu.ac.jp
  6. 締切：平成22年10月18日（月） 必着
  7. 着任時期：平成23年4月1日の予定
  8. 選考：当教室所定の手続きにより、地球学教室会議が選考し、理学研究科・理学部人事審査委員会で審査し、理学研究科・理学部教授会で決定します。選考の過程で必要に応じて面接を行う場合があります。この場合、交通費等は応募者の負担となります。選考結果は、平成22年12月下旬頃に通知する予定です。
- 詳細 URL <http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/geos/2011recruit.pdf>

### ◆日本第四紀学会 2010 年学会賞受賞講演会（第 2 回）・評議員会・シンポジウムのお知らせ

期日：2011 年 1 月 22 日（土）10:00～17:30

場所：奈良女子大学

（アクセス：近鉄奈良駅から徒歩 8 分；<http://www.nara-wu.ac.jp/accessmap.html>）

10:00～11:45【学会賞受賞講演会】文学部北棟 2 階 N 202 号室

10:00～10:05 開会あいさつ

10:05～10:45 学会賞受賞者：吉川周作（大阪市立大学名誉教授）

「火山灰層序および完新世環境地質に関する一連の研究」

休憩

11:00～11:45 学会賞受賞者：岡田篤正（立命館大学）

「変位地形を用いた活断層の活動史および活断層危険度評価に関する一連の研究」

12:00～13:20【評議員会】文学部北棟 2 階 N 201 号室

13:30～17:30【シンポジウム】文学部北棟 2 階 N 202 号室

近畿圏における第四紀研究～研究の現状と今後の課題～

（仮題；詳細は、次号通信にて掲載予定）

### ◆お詫び

第四紀通信前号(Vol.17-4)郵送版において以下の誤りがありました。兵頭政幸会員はじめ、関係者の皆様にご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。訂正をお願いいたします。

・第四紀通信 Vol.17-4（14 ページ記事 上 9 行目）

（誤）兵藤政幸

（正）兵頭政幸

#### ★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：苅谷愛彦（[kariya\(at\)isc.senshu-u.ac.jp](mailto:kariya(at)isc.senshu-u.ac.jp)）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 苅谷愛彦

〒214-8580 川崎市多摩区東三田 2-1-1 電話：044-911-1014 FAX：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail：[daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com) 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176